会報
特攻
平成24年2月

第90号

公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会
〒105-0014　東京都港区芝2-5-19TAビル
電　話　03（5730）1016
ＦＡＸ　03（5730）1017
http://www.tokkotai.or.jp
振替口座　00140-6-59580

編集人　飯田正能
発行人　羽渕徹也
印刷所　ヨシダ印刷株式会社

元旦午前零時の靖國神社拝殿前

年越し詣での人波（神門開扉直後）

奉納大絵馬

靖國神社年越し詣で

平成23年暮れの大晦日から24年元旦にかけて、恒例の靖國神社年越し詣でを行った。平成23年は大災害に見舞われた大厄年であった。中でも東日本大震災による大津波の被害と福島原発事故の災害は甚大であった。平成24年1月5日現在、死者1万5844人、行方不明者3450人、避難者33万4786人と報ぜられており、今なお、極寒の海で、海上保安庁のダイバーによる行方不明者の捜索が続けられているという。この災害によって改めて人と人との絆の大切さが見直され、助け合いの精神が甦り、「頑張れ日本」「頑張れ東北」の応援の声が上がり、救援の手が随所に差し延べられたが、政治の混迷により再生・復興への道のりは遅々として進まない。

明くれば平成24年、壬辰（みずのえたつ）の年、『広辞苑』によれば、十干十二支の暦法で、十二支をそれぞれ獣に充て辰を竜としたが、竜又は龍は仏教用語の梵語でNēga、蛇形の鬼神、地上・空中・水中に住し、雲雨を自在に支配する力を持つ、仏法守護の八部衆の一とある。筆者の七度目の当たり年でもあるが、昇龍にあやかって、今年こそ日本の復興・再生の年としたいものである。

「自衛官の倅」を自認する野田佳彦首相は、昨年9月総理就任後、何を総合的に考慮したのか知らないが、「総合的に考慮すると、首相や閣僚の靖國神社公式参拝は差し控えなければいけない」と述べ、自らも全閣僚も参拝し

目次

靖國神社年越し詣で　……1
謹賀新年　……2
平成24年年頭のご挨拶　……3
皇居参賀二題　……5
大東亜戦争の歴史的意義について
―戦後、アジアに十カ国の独立―……8
特別寄稿・大東亜戦争と神風特別攻撃隊―日本はなぜ世界で尊敬されるのか―……10
平成23年度フィリピン特攻基地慰霊祭に参加して　……24
川南護国神社例祭　……26
世田谷山観音寺・特攻平和観音月例法要に参列して……27
一葉の記念写真　……28
回天特攻戦没者慰霊祭　……29
世田谷山観音寺参拝　……30
靖國の御祭神に奉る歌と御祭神の遺詠　……31
和歌で綴る我が部隊史　……32
過去を掘り起こすこと　……32
少年特攻兵士の遺書　……34
「大刀洗平和記念館」を訪ねて……45
平成23年度第3回定時理事会・臨時評議員会等報告……45
事務局からの報告等　……48

ないと明言した。恐らく、中国や韓国の反発を考慮したのであろうが、インドやパキスタン、インドネシアやシンガポールその他アジア諸国の大東亜戦争に関する考えも考慮の対象とすべきである。「そうすれば中国や韓国とは全く異なる極めて肯定的な日本の歴史への評価があることに気付くだろう。広い視野で大東亜戦争を見ることなしに、歴史を政治の道具とする国々のみの考えを『考慮』して萎縮する首相が『国に殉じた方々に感謝や敬意を表するのは当然』などと発言するのは虚しい。他国の介入の前では引っ込めてしまう条件付きの感謝や敬意は、命を捧げた人々に失礼である」と、ジャーナリストの櫻井よしこ女史が、1月1日発行の靖國神社社報『やすくに』掲載の論考で述べておられるが、全く同感である。

また、民主党が野党であった平成17年、野田氏は「靖國神社にはA級戦犯が合祀されているから日本の首相は参拝してはならないという論理は破綻している」「サンフランシスコ講和条約や4回にわたる国会決議ですべての戦犯の名誉は法的に回復された」と述べた。野田首相は在任中に自説どおり、

謹賀新年

公益財団法人　偕行社

理事長　志摩　篤
副理事長　塩田　章
副理事長　福田　一彌
副理事長　深山　明敏
専務理事　白石　一郎
事務局長　若木　利博

公益財団法人　水交会

会長　林崎　千明
理事長　夏川　和也
副理事長　袰岩　壮吉
専務理事　藤田　幸生
事務局長　池邑　正男

つばさ会

会長　竹河内捷次
副会長　杉山　弘
副会長　山本　修三
副会長　藤川　壽夫
副会長　小田　邦博
専務理事　山本　隆之
副専務理事　小鹿　勝見

公益財団法人　大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会

理事長　山本　卓眞
副理事長　齋須　重一
専務理事　柚木　文夫

公益財団法人　特攻隊戦没者慰霊顕彰会

名誉会長　山本　卓眞
顧問　菅原　道熙
理事長　杉山　蕃
専務理事　藤田　幸生
理事　深山　明敏
理事　大久保　隆
理事　廣嶋　文武
理事　臼田　智子
理事　笹　幸恵
理事　衣笠　陽雄
監事　伊集院雅英
監事　栗原　宏
事務局長　羽渕　徹也

評議員　秋山　政隆
評議員　穴山　正司
評議員　飯田　正能
評議員　石井　光政
評議員　石井　千春
評議員　及川　昌彦
評議員　大穂　孝子
評議員　小倉　利之
評議員　倉形　桃代
評議員　田村　力
評議員　中江　仁
評議員　中村　家久
評議員　新垣　敬輝
評議員　根木　東洋
評議員　水町　博勝
評議員　大田　兼照
評議員　高嶋　博視

平成24年　年頭のご挨拶

理事長　杉山　蕃

全国の慰霊顕彰会関係の皆様、明けましておめでとうございます。謹んで新年を寿ぎ、皆様にとつて良い年になりますよう、心より祈念申し上げます。

思えば昨年は、我が国にとって苦難の年でありました。大正12年の関東大震災以来88年振りに東日本を襲った大地震・大津波は歴史に残る大惨事でありました。加えて津波災害が惹起した原発事故により、我が国のみでなく、エネルギー供給手段を巡る世界全体の問題となりました。勿論、東北地方を中心とする復興は、国全体の課題でありますが、同時に世界中から寄せられた「日本はきっと立派に再生す。ガンバレ！」の好意ある声援・支援に応え、後年、「さすが日本！」と言われるよう頑張る意気込みが必要でありましょう。

翻って我が顕彰会も昨年は大きな節目を迎えました。公益法人制度改革法に基づき、新たに公益財団法人として認可を受け、会名も特攻隊戦没者慰霊顕彰会と改称、新たにスタートを切りました。更に夏には、永年会長、副会長としてご活躍頂いた山本卓眞会長と菅原道熙副会長が、それぞれ名誉会長と顧問に替わられ、世代交代が進むこととなりました。諸先輩の果たされた献身的なご貢献には、頭の下がる思いですが、八十路も半ばを越えられたことを考えればやむを得ぬ事態かと存じております。そしてこれは、単なる若返りではなく、旧軍籍にあった方々から続く世代への継承という意味があり、真に重要な節目と理解いたしております。同時に会員の主力でありました御遺族・戦友の方々の年齢的問題も重く、会員数の減少という厳しい現実にも対処する必要があります。何とも厳しい状況ではありますが、戦後吹き荒れた左翼的症候群とも言える嵐の中、心ある旧軍関係者が護り抜かれてきた慰霊事業を、後継する世代がより広い階層から賛同する方々を集め、立派に発展させていくことが必要とされていると言えるでしょう。１９７５年（昭和50年）、私は米国での研修中に、心に残る光景に出会いました。当時米国はベトナム戦争に失敗し、国全体が荒み、治安が乱れ、首都ワシントンでさえ限られた街路しか安全が確保されないという暗澹たる状態でした。そのような雰囲気の中、私が訪れておりました有名なＮＯＲＡＤ（シャイアンマウンテン基地）に、寒気厳しい朝、麓の駐屯地の陸軍連隊が、連隊旗を先頭に隊伍を組み、上半身裸ながら汗みどろになって駆け上がって来たのです。予め周知されていた行事らしく、基地隊員や付近住民の歓声の中、意気高く到着しましたが、翌朝の新聞を始め「これで陸軍はリアップした。もう大丈夫だ」とする声が高く、国民の「復活前進意識」を肌で感じました。空軍基地将校は、かつて頻繁であったこの訓練もベトナム戦終期からは行われておらず、復活への象徴的行事であると絶賛しておりました。その後米国は厳しい冷戦下再生を果たし、ベルリンの壁崩壊に至るわけですが、私はこの国の人達の「困難に際し最大の努力をする。それが最善の方法である」とする強さを垣間見ました。

我が国も、顕彰会も厳しい新年を迎えましたが、強い意志を持って最善の努力をすることが何より必要とされることは明白です。幸い顕彰会の事業は、靖國神社での合同慰霊祭、世田谷山観音寺での年次法要、各地の慰霊行事への参加支援、護国神社への特攻勇士の像の奉納を始めとして順調に執り行われております。春には現事務所をより整った環境へ移転する計画も進んでおります。ここ数年、年と共に厳しさは倍加しますが、強い意志を持って、慰霊顕彰事業を継続し、戦没者の御霊が私達に何を残して下さったのかを噛み締め、奮い立って行きたいと考えております。

重ねて今年が皆様にとって良い年になりますよう祈念申し上げます。

靖國神社に堂々と公式参拝すべきである。実行すれば当然、国内外から非難の声が上がるだろう。勿論、日本国民は毅然として野田首相を支えるべきである。首相になったからといって信念を曲げ、弱腰になってはならない。このような時こそ、靖國の英霊の御前で、英霊が未来に託された尊いその志を我

が心に刻むべきであろう。この度の年越し詣では、取り分けその思いに駆られつつ家を出た。

靖國神社ほど参詣者を手厚く遇して下さる神社はないのではないか。特に年越し詣でに当たっては、寒さを凌ぐための種々の配慮がなされている。境内各所での、ボーイスカウト東京連盟の大勢の少年・少女達による庭燎（かがり火）奉仕、遊就館前における熱い甘酒の接待、終夜開館されている遊就館、参集殿内でのお茶の接待等々。勿論、外苑参道の両側には沢山の屋台が立ち並び、参詣者が一時の暖を取り腹拵えをするには事欠かない。若者や家族連れにとつては楽しい年越し詣でである。日本人の古里がそこにはある。そして、内苑に進み身を清めて神前に頭を垂れれば、我々の先祖や先輩、同僚の御霊が手厚く祀られている。国のため命を捧げた人々の英魂が、身分の如何を問わず鄭重に祀られているのである。

元旦午前零時過ぎ拝殿前の人波

遊就館前　庭燎奉仕のボーイスカウト

地下鉄九段下駅を出て坂を登れば、やがて大鳥居が漆黒の空に、ライトを受けて巨人の如く聳え立ち、更にその上の中天には、星が瞬く。これより第二鳥居までの参道両側には、沢山の屋台が並び、食べ物の臭いや参詣者のさんざめきに包まれ、いずこも同じ年越し詣での景観である。だが、ここまでは外苑、下乗札の立つ内苑神域に入れば、凛とした空気に包まれ、数百の参詣者が静かに開門を待つ。圧倒的に若者が多く、筆者のような高齢者の姿はほとんど見当たらない。外国人の姿もかなり多い。歴史と伝統のある日本人の風習が、そして日本人の美しい心が、外国人の目にはどのように映っているのであろうか。閉ざされた神門中央扉の十六重弁菊の大御紋章がライトを受けて金色に輝き、大凧と大羽子板が左右の柱に飾られて、新しい年への門出を祝するかのようである。大手水舎の銅板屋根もライトを受けて輝き、その前で庭燎（かがり火）奉仕をするボーイスカウトの少年達の姿も凛々しく映える。

全国神社奉納絵馬展

やがて零時30分前、一斉に開扉されると、ライトアップされた正面の拝殿が神々しく目に飛び込んでくる。一同粛々と拝殿前の鳥居付近まで進む。この日、大晦日の夜は風も凪いで絶好の日和、漆黒の空を背景に拝殿の甍が聳え立ち、金色の御紋章がライトに映えて輝き、見事なコントラストをなしている。更にまた今日の拝殿は特別に紫の幔幕を廻らし、白く染め抜かれた十六重弁菊の大御紋章が目に鮮やかである。

正零時、暗夜の静寂を破って拝殿の大太鼓が鳴り響くと、一斉に「明けましておめでとうございます」と互いに挨拶を交わして拝殿に進み、柏手を打ち、深く低頭して御霊に感謝の誠を捧げる。若者達が中心ではあるが、真摯な参詣者の姿がそこにある。

新年拝殿掲示の皇后陛下の御歌は、「年ごとに月の在りどを確かむる祭旦（さいたん）祭に君を送りて」とあり、平成19年歌会始の御題「月」を詠まれたものであるが、夙に優れた歌人として国際的にも有名な皇后陛下の御歌には深い祈りや慈しみの御心が込められており、霊性とも霊力とも言うべき不思議な力、

人々の心に深い感動を与える力を持っている。平成18年5月、パリのシグナトゥラ社から皇后陛下の御歌53首の仏語訳御撰歌集“Sé-oto Le chant du gue”『セオト―せせらぎの歌』が刊行され、フランスを始めとしてヨーロッパやアフリカのフランス語圏で静かなブームとなり、世界の人々の感動を呼び起こした。その著者（訳者）は筑波大学名誉教授、コレージュ・ド・フランス元客員教授で長年パリに在住し、文化、美術等の評論活動を続けてこられた竹本忠雄氏であるが、平成20年に帰国後、その御撰歌集の翻訳過程と反響等を交えて綴った日本語版として平成20年5月30日に扶桑社から発行されたのが『皇后宮美智子さま　祈りの御歌』である。筆者も公益法人大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会の会報『慰霊』第11号・平成20年10月1日発行に紹介させていただいたが、誠に感動的な御撰歌集であり、題名の「祈りの御歌」に相応しい言霊とも言うべき御心の溢れた秀歌に満たされており、これに感動したアフリカの人々が「日本には、聖母マリアのようなジボ・カンノンという神様がいらっしゃいます。誠に皇后陛下美智子様は、日本の慈母観音であらせられます」と絶賛している。前記の新年1月拝殿掲示の皇后陛下御歌も右の御撰歌集に収録されているが、祭旦祭という年頭の厳粛な儀式へと天皇が向かわれ、謹んで皇后がその御姿をお見送りになる光景が厳かに歌われている。「お立ちになる皇后、その御目の届かない方へと歩み行かれる天皇、その彼方に聳える古神殿、その遥か彼方の空に一点、耿として月は輝き、その月は瞬時の間に位相を変えつつ、ゆっくりと通り過ぎていく、この御歌の真の背景をなしているのは、この天上の時間であり、動きです。それを『確かめる』と表された。神殿の千木よりもなお高く、元日の暁暗に輝く月、日本の神々のふるさとへと視線を投げながら。日本では、神話とは、伝説でも過去でもありません。永遠に生きられているのです」と著者は解説しておられる。真に神々しくも美しい心洗われる御歌である

拝殿の右側には例年の如く伊勢絵馬協賛会から献上された大絵馬が掲げられている。今年は壬辰年、干支の竜に因み、霊力溢れる見事な龍の絵が描かれている。また、参集殿の前には、全国約三百三十余社から奉納された絵馬が美しく飾られており、その中に懐かしい郷里の氏神様の絵馬を発見して感無量。靖國神社に寄せる、護国神社を始めとする全国の神社及び善良なる国民の崇敬心の篤さを思わせる。

更に、境内各所で、庭燎奉仕をするボーイスカウト東京連盟の大勢の少年少女達や受付案内の事務奉仕をする崇敬奉賛会青年部「あさなぎ」の若者達の健気な姿に感動。このような日本人の心を受け継ぐ青少年のいる限り、未来への展望が開けるような気がする。参拝を終え、神社心尽くしの甘酒で一息ついた後、夜通し開館されている遊就館を拝観して神社を後にした。

（飯田正能記）

皇居参賀二題

例年のとおり、暮れと正月、二度の参賀に皇居を訪れた。12月23日の天皇誕生日と1月2日の一般参賀である。いずれも好天に恵まれて多くの人々が訪れた。天皇陛下は昨年の12月23日、御年78歳の御誕生日を迎えられた。誠に慶賀に堪えないところであり、心より聖寿万歳を祈念申し上げる。

御誕生日を迎えられ、この1年を振り返られての御感想を、記者会見に替え文書で発表されたが、多くの部分を東日本大震災や豪雨被害について割かれ、「災害に明け暮れた心の重い年」であったが、被災者が助け合う姿やボランティアなど支援活動を心強く感じたと綴られ、来年も「被災者に心を寄せつつ過ごしていきたい」と記された。また、先月の御入院を気遣ってくれた人々に感謝し、御体調は「発病前の状態と変わらないように感じます」と記され、「被災地に再び厳しい寒さが訪れようとしています」と被災者の健康を案じ、自衛隊、警察、消防、原発事故の対応に当たる関係者らに深い謝意を示された。更に北海道南西沖地震による奥尻島の津波被害などに詳細に触れられ、過去に学んでの防災訓練や教育の重要性にも言及された。

如何なる政・官・財・学各界代表者の言よりも、陛下のお言葉は誠実味と恩愛の情に溢れ、有り難く身に沁みる思いがする。

○天皇・皇后両陛下が平成23年にお詠みになられた御歌（宮内庁発表）

天皇陛下御製（5首）

〈東日本大震災の津波の映像を見て〉

黒き水うねり広がり進み行く

仙台平野をいたみつつ見る

〈東日本大震災の被災者を見舞ひて〉

大いなるまがのいたみに耐えて

生くる人の言葉に心打たるる

〈東日本大震災後相馬市を訪れて〉

津波寄すと雄々しくも沖に出でし
　船もどりきてもやふ姿うれしき

〈共に喜寿を迎へて〉
五十余年吾を支へ来し
　我が妹も七十七の歳迎へたり

〈仮設住宅の人々を思ひて〉
被災地に寒き日のまた巡り来ぬ
　心にかかる仮住まひの人

皇后陛下御歌（3首）

〈手紙〉
「生きてるといいねママお元気ですか」
　文に項傾し幼な児眠る

〈海〉
何事もあらざりしごと
　海のありかの大波は何にてありし

〈この年の春〉
草むらに白き十字の花咲きて
　罪なく人の死にし春逝く

○天皇誕生日参賀

今日は12月23日、天皇御誕生の佳き日である。

前夜までは寒風が吹き荒れ、時折冷たい氷雨の降る天候であったが、明け方には雨も上がり、時折薄日の差す天気となった。それでも冷たい風の吹く中を、毎年の嘉例により皇居一般参賀（午前中3回お出まし、午後は記帳のみ）に出掛けた。

今回は第1回のお出まし（10時10分頃）に間に合うようにと、9時30分の正門開扉時刻に合わせて、地下鉄大手町駅から皇居前広場に向かったが、既に検問所前は参賀の人波で一杯であった。昨年は、平成に入って2番目の2万6千人を超えたということであったが、今年は大災害の続いた年であったにも拘わらず、一般参賀の人員は、昨年に劣らぬ2万4789人に及んだという。若い人や家族連れが多く、特に外国人の多さが目立つ。我が国の皇室に対する敬愛の念は、今や国際的である。

しかも、内外を問わず、いずれの人の顔も晴れやかに見える。

天候は次第に回復し、青い空と皇居の緑、それに参賀の人々が手にする日の丸の小旗が映えて美しい。やがて天皇、皇后両陛下を始め皇太子・同妃両殿下、秋篠宮・同妃両殿下、及び今年成人を迎えられた眞子内親王殿下の七方が長和殿ベランダにお出ましになると、宮殿前を埋める参賀の人々から一斉に万歳の声が上がり、日の丸の小旗が打ち振られる。これに応えて両陛下並びに皇族方が御手を振られ、にこやかに会釈をされる。皇室と国民を結び付ける最も美しい光景である。その後天皇陛下は、短い御言葉を賜るが、決まって国民の幸せを第一に祈念される。

「誕生日に当たり、多くの皆さんの祝意に感謝します。今年は、春には東日本大震災が起こり、秋には台風などによる大雨で多くの人命が失われました。遺族や被災者のことを思うと心が痛みます。そのような中で多くの人々が被災者のために尽くしていることを知り嬉しく思います。厳しい年ではありましたが、これからも被災者のことを忘れることなく、国民の皆さんの幸せを願って過ごしていきたいと思っています。来る年が皆さん一人一人にとり少しでも良い年となるよう願っています」と述べられた。

国民と国家の象徴として努められる、真に真摯で崇高な御姿である。

参賀を終えて、皇居東御苑を経、北の丸公園を通って靖國神社へ向かう。この日は、今上陛下のめでたい御誕生日であると同時に、かの忌まわしい極東国際軍事裁判（いわゆる東京裁判）の判決で、いわゆるA級戦犯として絞首刑を言い渡された（昭和23年11月12日）七士の方々（土肥原賢二、松井石根、東條英機、武藤章、板垣征四郎、廣田弘毅、木村兵太郎）が、巣鴨拘置所において処刑された日（昭和23年12月23日午前0時1分と0時20分）から63年目の命日（64回忌）でもある。いわゆる東京裁判は、昭和21年4月29日の昭和天皇御誕生日（天長節）に始まり（起訴）、当時皇太子殿下であられた今上陛下の御誕生日に終結する（処刑）ように仕組まれた。そして天皇のみならず、日本国民に永久に負い目を忘れることのないよう、東京裁判史観による洗脳を工作したのである。

靖國神社参拝を終えて、遊就館前の「ラダ・ビノード・パール博士顕彰碑」に参拝する。この日の顕彰碑には生花が供えられ、大勢の人々、特に若者達が碑前に佇んで熱心に碑文と靖國神社前宮司故南部利昭氏が捧げた建立の「頌」に見入っていた。この碑文と「頌」は、極東国際軍事裁判の不当性と同裁判所判事としてただ一人、全員無罪を主張したインド代表判事パール博士の崇高な使命感を端的に表していると思われるので、再度掲示する。

「　**碑　文**（意見書の結語）

時が熱狂と偏見とを
やわらげた暁には
また理性が虚偽から

その仮面を剥ぎとった暁には
その時こそ正義の女神は
その秤を平衡に保ちながら
過去の賞罰の多くに
そのところを変えることを
要求するであろう

ラダ・ビノード・パール

「　頌

ラダ・ビノード・パール博士は、昭和二十一（一九四六）年五月東京に開設された「極東国際軍事裁判所」法廷のインド代表判事として着任され、昭和二十三年十一月の結審・判決に至るまで、他事一切を顧みる事なく専心この裁判に關する膨大な史料の調査と分析に没頭されました。

博士はこの裁判を擔當した連合國十一箇國の裁判官の中で唯一人の國際法専門の判事であると同時に、法の正義を守らんとの熱烈な使命感と、高度の文明史的見識の持主でありました。博士はこの通称『東京裁判』が、勝利に傲る連合國の、今や無力となった敗戦國日本に對する野蛮な復讐の儀式に過ぎない事を看破し、事實誤認に満ちた連合國の訴追には法的根據が全く缺けている事を論証し、被告團に對し無罪と判決する浩翰な意見書を公にされたのであります。

その意見書の結語にある如く、大多数連合國の復讐熱と史的偏見が漸く収まりつつある現在、博士の裁定は今や文明世界の國際法學界に於ける定説と認められたのです。

私共は茲に法の正義と歴史の道理とを守り抜いたパール博士の勇気と情熱を顕彰し、その言葉を日本國民に向けられた貴重な遺訓として銘記するためにこの碑を建立し、博士の偉業を千古に傳へんとするものであります。

平成十七年六月二十五日

靖國神社　宮司　南部利昭　」

パール博士顕彰碑

○新年一般参賀

大晦日以来三日続きの晴天、一点の雲もない日本晴れ、正に参賀日和である。1月2日は筆者の誕生日でもあって、家族共々朝早めの祝い膳を頂いて家を出た。

新年参賀はさすがに規模が大きい、皇居外苑では、馬場先門、和田倉門、桜田門の三方向から進んできた参賀の人波を各検問所で検査をした後、警官の誘導に従い石橋を渡って正門から入り、鉄橋（二重橋）を渡って宮殿長和殿前の広場に至る。いずれも長蛇の列である。早めにと思って家を出たが、地下鉄駅から検問所まで約20分、検問所から正門石橋前まで約20分、そこから更に広場まで約20分と約1時間を要したため、第1回の御出御（10時20分頃）にようやく間に合った。およそ2万人を収容できるという長和殿前の広場は、手に手に日の丸の小旗を持った参賀の人々で忽ち一杯になった。やはり若者が圧倒的に多く、華やかな雰囲気に満ちている。外国人も非常に多い。観光ツアーと思われる団体も多い。喜ばしいことである。参賀は日本の伝統文化でもあるからだ。

やがて定刻、天皇・皇后両陛下を先頭に、皇太子・同妃両殿下、秋篠宮・同妃両殿下ほか皇族方が御出御になられると、一斉に日の丸の小旗が打ち振られ、天皇陛下万歳の歓声が上がり、両陛下と皇族方がお手を振ってにこやかに応えられた。この日の皇族方は、皇太子・同妃両殿下、秋篠宮・同妃両殿下、眞子内親王殿下のほか、三笠宮彬子（あきこ）女王殿下、高円宮妃、承子（つぐこ）女王殿下、典子（のりこ）女王殿下、絢子（あやこ）女王殿下の10方に両陛下合わせて12方という、誠に豪華な、華やいだ感じのする御出御であり、皇族方のお健やかな御容姿を拝し、誠に喜ばしい限りであった。

天皇陛下は、昨年の東日本大震災や各地の豪雨被害に触れられ「被災した人々が今なお厳しい状態に置かれていることを案じていますが、被災地の復興が進み、今年が国民一人びとりにとり、少しでも良い年となるよう願っています」とのお言葉を賜った。

過重な御公務の中にあって絶えず国民の上に思いを寄せられる、誠実で優しい陛下の大御心に感動させられた。

今年の一般参賀での両陛下と皇族方の御出御は、午前3回、午後2回の計5回、参賀者数は、昨年とほぼ同じく約7万7千人に達したという。身も心も清められ、晴れ晴れとした思いで宮殿前広場を後にした。　（飯田正能記）

○平成24年「宮中歌会始」の御儀

新春恒例の「宮中歌会始」の御儀が1月12日午前、皇居正殿「松の間」において、古式に則り厳かに行われた。今年の勅題は「岸」で、天皇・皇后両陛下の御製・御歌、皇族方のお歌、特

に招かれた歌を詠む召人の歌と選者の歌、1万8830首の中から選ばれた選歌10首（今年の最年少は大阪府の伊藤可奈さん17歳、最年長は茨城県の寺門龍一さん81歳）が、天皇陛下の御前で披講された。

天皇陛下御製

津波来し時の岸辺は如何なりしと見下ろす海は青く静まる

皇后陛下御歌

帰り来るを立ちて待てるに季のなく岸とふ文字を歳時記に見ず

皇太子徳仁親王殿下お歌

朝まだき十和田湖岸におりたてばはるかに黒き八甲田山見ゆ

皇太子妃雅子殿下お歌

春あさき林あゆめば仁田沼の岸辺に群れてみづばせう咲く

秋篠宮文仁親王殿下お歌

湧水の戻りし川の岸辺より魚影を見つつ人ら嬉しむ

秋篠宮紀子妃殿下お歌

難き日々の思ひわかちて沿岸と内陸の人らたづさへ生くる

秋篠宮眞子内親王殿下お歌

人々の想ひ託されし遷宮の大木岸にたどり着きたり

常陸宮正仁親王殿下お歌

海草は岸によせくる波にゆらぎ浮きては沈み流れ行くなり

常陸宮華子妃殿下お歌

被災地の復興願ひ東北の岸辺に花火はじまらむとす

三笠宮百合子妃殿下お歌

今宵揚ぐる花火の支度始まりぬ九頭竜川の岸の川原

三笠宮彬子女王殿下お歌

大文字の頂に立ちて見る炎みたま送りの岸となりしか

高円宮久子妃殿下お歌

福寿草ゆきまだ残る斐伊川の岸辺に咲けり陽だまりの中

高円宮承子女王殿下お歌

紅葉の美しき赤坂の菖蒲池岸辺に輝く翡翠の青

高円宮典子女王殿下お歌

対岸の山肌覆ふもみぢ葉は水面の色をあかく染めたり

高円宮絢子女王殿下お歌

海原をすすむ和船の遠き影岸に座りてしばし眺むる

◇

○選歌（詠進歌10首、生年月日順）

茨城県　寺門　龍一（81）

いわきより北へと向かふ日をまちて常磐線は海岸を行く

埼玉県　佐藤　洋子（77）

対岸の街の明かりのほの見えて隠岐の入り江の静かなる夜

奈良県　山崎孝次郎（72）

相馬市の海岸近くの避難所に吾が子いるを知り三日眠れず

長野県　小林　勝人（71）

ほのぼのと河岸段丘に朝日さしメガソーラーはかがやき始む

大阪府　山地あい子（70）

しほとんぼ追うて岸辺をかける子らつういつういと空はさびしい

千葉県　宮野　俊洋（67）

春浅き海岸に咲く菜の花を介護のバスが一回りせり

カンボジア・プノンペン　渡邉　榮樹（65）

子らは浴み岸辺に牛が草を食むこぞの我らが地雷処理跡

京都府　大石　悦子（57）

とび石の亀の甲羅を踏みわたる対岸にながく夫を待たせて

福島県　沢辺裕栄子（39）

巻き戻すことのできない現実がずっしり重き海岸通り

大阪府　伊藤　可奈（17）

岸辺から手を振る君に振りかへすけれど夕日で君がみえない

大東亜戦争の歴史的意義について

―戦後、アジアに十カ国の独立―

全国戦争犠牲者援護会会長
元衆議院議長　清瀬　一郎

「編注・本稿は、公益財団法人偕行社の機関誌『偕行』昭和41年5月号に掲載されたものであるが、執筆者は、言うまでもなく、かの極東国際軍事裁判（いわゆる東京裁判）の主任弁護人を担当して活躍され、後に、衆議院議員となられて議長を務められた清瀬一郎博士である。大東亜戦争の歴史的意義に関する貴重な玉稿であるから、同社のご了承を得て転載させていただくものである。」

◇　◇　◇

大東亜戦争は世界の歴史上、実に大きな事件であります。かような重大事件の意義というものは、その直後では、とても判定できるものではありません。少くも五十年か、百年近くたって、はじめて最後の判断が可能であります。しかし、今日すでに終戦から二十年の歳月を経ましたから、吾々も吾々なりに、その意義について予定的に探究してもよかろうと思います。

当時、われわれは大東亜建設、大東亜共栄圏の造成を唱えました。これは無駄なことであったのでありましょうか。

一七五七年、プラシイの戦勝で英国勢力が印度を圧し、一六〇二年、オランダがジャワ・スマトラを独占し、また、かの一八四〇年以来、今の中共、当時の清朝の政治は、欧米勢力下の半植民地となっておりました。

二十世紀に至り、この不自然は修正されなければならぬ時期となり、その状勢も熟して来ておったのであります。ことに東亜のうちでは、最も早く進んでおると目された日本において、大東亜の解放の思想が発生したのは、必ずしも不自然ではなかったのであります。

戦争指導の巧拙のことは、いま論じませぬ。

この戦争を不正な動機より起こった侵略戦争であったと、一概に排斥するのは、あまりに一方的であります。しかし、とにかく、昭和20年（一九四五年）8月15日に、わが国は敵の条件を認めて和を講じたのであります。（これは無条件降伏ではない。ポツダム宣言中、第六項より第十三項までの条件でなした降伏である。）

日本降伏より後に、東洋で起こった事柄は、歴史上甚だ示唆に富むものがあります。今、これを簡単に述べてみましょう。

⑴　インドネシアでは、日本が休戦を決意した一九四五年8月11日（同月15日より前）、ジャカルタの国民大会で独立が宣言されました。その後、数年間、旧宗主権国オランダとの間に独立戦争と独立論争が続けられ、遂に一九四五年9月から、ハーグで円卓会議が開かれ、その年の12月27日、オランダは正式にインドネシアに主権の移譲を認めた。

⑵　フィリッピンは終戦の翌年である一九四六年7月4日、米国よりの独立を認められた（それより先、日本占領中に、わが国はフィリッピンの独立を認めました）。

⑶　北ベトナムは、同じく一九四六年11月、独自の憲法を作り、フランスより独立し、一九五四年、ジュネーブ休戦協定を結んだ。

⑷　南ベトナムは一九四九年3月、フランスと休戦、一九五六年、ジュネーブ休戦協定を結んだ。

⑸　カンボジャは一九四七年5月6日、憲法を制定し、一九五四年軍事同盟や、外国軍事基地条約を含む協定は結ばないと宣言した。

⑹　ラオスは一九五三年、フランス連合内での独立を獲得し、翌五四年インドシナ条約を結んだ。

⑺　マラヤは一九五七年8月、英連邦内での独立国となり、その後、一九六四年9月16日マレーシャ連邦を発足した。

⑻　パキスタンは一九四七年8月14日、インドと分離、英連邦内の自治領となり、一九五六年、英連邦内の共和国となった。

⑼　インドは一九四七年8月15日、独立が実現し、一九五〇年1月、憲法を制定し英連邦内の民主共和国となった。

⑽　ビルマは一九四八年1月4日独立、しかも英連邦に加わらなかった。

大東亜戦争が終わったその日から五、六年の間に、かつて我が国の占領しておった大東亜の地域で十カ国が、植民地の羈絆から脱して独立したのであります。この事実は、大東亜戦争と無関係で解釈ができましょうか。

大東亜戦争は東亜各民族に自覚を与え、自信を呼び起し、旧植民地国に時代の推移の承認を強い、新時代に応ずる決心を迫りました。その結果、かくの如き短期間の間に十カ国もが独立を完成したのであります。今日は、実に旧植民地主義は滅びた、といっても過言ではありませぬ。

長き眼で見れば、人類、わけても東洋各地の諸民族の地位は、ここに、一大変化を遂げんとしております。大東亜戦争は、実に、その序曲でありました。東亜の各地域、太平洋の各島嶼にて命を抛って働かれた英霊の命は無駄ではありませんでした。諸英霊は、人類の歴史の上において尊い功績を挙げられたのであります。後世の史家は、恐らく、これを認めるに相違ありません。

終戦後、永い間、わが国は敵国司令官の占領となり、わが国の中にも、その指導に追随する者多く、正しい認識が失われんとするのを悲しまざるを得ませぬ。

以上の如く、東亜解放の事業は英霊諸兄の犠牲により、その実を挙げはしましたが、ここに戦後一九四九年に、北京において共産主義の政府が成立しました。これも、実は、世界における重大事件であります。彼らは自己の国、自己の同胞を共産化することをもって満足せず、世界の赤化を終局の目的として行動しておるのであります。今日、南北ベトナム、ラオス、インドネシアの苦悩は、実に、ここより出発しております。その他の東洋各地もこの心配より免れることは出来ませぬ。

幸いに、わが国は戦後異常の経済、技術の発達を見ました。わが国の今日および今後の実力をもって東亜各地の同胞を助け、英霊各位の意志を遂げることは、生き残った吾々ならびに吾々を継ぐ者の大きな責任でありましょう。

特別寄稿

大東亜戦争と神風特別攻撃隊―日本はなぜ世界で尊敬されるのか―

旭川大学地域研究所
特別研究員（会員）中川　聖（さとし）

中川　聖特別研究員

白人不敗の神話を崩壊させた大東亜戦争

村山元首相は平成七年八月十五日に、大東亜戦争はアジアに対する侵略行為だったとする談話を発表したが、この戦争の誘因の一つは連合国軍最高司令官のマッカーサー元帥が回想記で指摘しているように、「日本がルーズベルト大統領によって経済制裁をおそれたことにあった」ことは明らかである。

日本は昭和十六年十二月八日、自存自衛と大東亜共栄圏の理想を実現するべく、日本を戦争に追い込んだ欧米諸国に立ち向かったが、これは十三世紀末に「元寇」がアジアと西欧に与えた衝撃とは質を異にする衝撃をもたらした。

英国の史家アーノルド・J・トインビーは英紙『オブザーバー』（一九五六年十月二十八日付）で、大東亜戦争の衝撃について次のように述べている。

「第二次大戦において、日本人は日本のためと言うよりも、むしろ戦争によって利益を得た国のために、偉大なる歴史を残したと言わねばならない。その国々とは、日本の掲げた短命な理想である大東亜共栄圏に含まれていた国々である。日本人が歴史上に残した業績の意義は、西洋人以外の人類の面前において、アジアとアフリカを支配してきた西洋人が過去二百年の間に考えられていたような、不敗の半神でないことを明らかに示した点にある。イギリス人もフランス人も米国人も、ともかく我々はみな将棋倒しにバタバタやられてしまった。そして最後に米国人だけが軍事上の栄誉を保ちえたのである。他の三国は不面目な敗北を記録したことは、疑うべくもない」

白人不敗の神話を崩壊させた日本軍は、僅か半年間で東南アジア全域を西欧列強の植民地支配から解放した後、東南アジアの各地に義勇軍を設立して軍事訓練を施し、敗戦後に展開された「第二次大東亜戦争」ともいうべきアジア諸国の民族解放戦争と民族独立運動に契機を与えていったのである。

「九死に一生」から「必死必中」へ

だが、緒戦の勝利にもかかわらず、やがて日本軍がミッドウェー作戦（昭和十七年六月五日）とガダルカナル島攻防戦（同年八月七日～翌年二月七日）に敗れると、昭和十九年初頭より「あ号作戦」（「マリアナ・カロリン・西部ニューギニアを結ぶ線を絶対国防圏として来るべき決戦に備えた作戦」）を展開して米軍の反攻に備えたが、日本軍に対する暗号解読、レーダー及びVT信管付砲弾を駆使した米軍の反撃の前に次第に守戦に立たされるようになっていった。

このため『城英一郎大佐が体当たり攻撃隊を編成して自分をその指揮官に任じてもらいたいと進言し、岡村基春大佐が「私に三百機の体当たり攻撃隊をつくらしてください。かならず戦勢を挽回します」と進言したのも、この頃であった。体当たりによって爆撃精度を極度に向上させて、敵の空母を爆沈しようという考え方は、当時の第一線にあった人々の心の奥に高まっていった』のである。

こうした中で軍需省航空兵器総務局長の大西瀧治郎中将が大本営海軍部の首脳に対して、次のような意見を具申したのは昭和十九年十月上旬であった。

「御承知の通り、最近の敵空母部隊はレーダーを活用し、空中待機の戦闘機を配置し、三段構えで備えている。そしてわが攻撃機を遠距離で捕捉し、これを撃退することが非常に巧妙になってきた。そのため、敵警戒網を突破、または回避して、攻撃目標に到達することが困難となっている。また犠牲が大きく有効な攻撃をすることができない。

これを打開するには、第一線将兵の殉国・犠牲の至誠に訴えて、体当たり攻撃を敢行するほかに良策はないと考える。大本営としても、これについて了解していただきたい」

戦後の日本では、特攻隊などの例を引き合いに出して戦前の日本軍は、人命軽視だったかのように言われているが、果たしてそうであろうか。元来、帝国海軍では大戦末期の特攻戦法を別にして「九死に一生」が大原則であった。日露戦役の諸海戦においても、海軍元帥東郷平八郎は、「つねにこの種の特攻攻撃を許さず、生還の方法が附

帯した場合にのみこれを認めたので有名である。当時いまだ潜水艦のなかった明治三十七年五月、海軍少尉横尾敬義は、魚形水雷を抱いて敵主力艦セバストポール号を攻撃しようと決意したが、事前に東郷司令長官の耳に入って制止された事実がある」

また敵の軍港の出入口に商船を沈めて軍艦の出航を阻止せんとした旅順口閉塞決死隊の場合もまた同様に、東郷元帥は「隊員の収容に万全を期するまでは計画を許可せず、五隻の閉塞船に直衛水雷艇各一隻、間接支援に駆逐艦十二隻、水雷艇八隻を動員してこれを実施し、大部分の兵員を生還させたのであった」

つまり、帝国海軍では九十九％死を伴う「決死攻撃はつねにこれを行うけれども、はじめから生還の道のない攻撃法は、断じてこれをしりぞけてきた」のである。

大東亜戦争においても、帝国海軍は、この大原則を以て戦闘に臨んだ。例えば、連合艦隊司令長官山本五十六は、真珠湾攻撃に対する特殊潜航艇を使用する案を二回まで却下して攻撃後に、収容法が信用できると認められるにいたって、ようやく許可を与えたのである。

特攻に対する着想や意見は、既にソロモン地域での苦戦の頃から胎動していたが、海軍上層部では、「必死必中」の特攻戦法を受容しなかったため具体的な進展は見られなかった。にもかかわらず、このような伝統的な戦法から「必死必中」の特攻戦法に転じたのは、大西中将が大本営海軍部の首脳に対して述べたような特殊な事情が背景にあったことを理解しておかなければならないだろう。

別言すれば、日米の航空戦力の格差から戦局は、「九死に一生」の大原則を踏みこえざるを得ないような言わば「死に物狂い」の様相を呈していたと言えるのである。

その第一の現れが、連合艦隊の主力である栗田艦隊の「レイテ湾なぐり込み」の作戦命令であった。

大西中将の「限定特攻」

第一線に展開していた各航空部隊は、十月十日から比島及び台湾の航空基地を空襲して航空撃滅戦を仕掛けてきた敵機動部隊を激撃してよく奮戦したが、各隊とも相当な被害を出していた。大西中将は十七日に、マニラに到着すると、第一航空艦隊司令部の寺岡謹平長官と実務的な引き継ぎを行ったが、マッカーサー軍は、昨日よりレイテ湾口のスルアン島に上陸を開始していた。

連合艦隊が十八日に、敵上陸を阻止すべく、「捷一号作戦」を発動して栗田艦隊にレイテ湾に突入させることを知った大西中将（二十日に第一航空艦隊司令長官に就任）は、航空兵力を持たない、水上艦艇だけの栗田艦隊をなんとかレイテ湾まで針路を開かせるため使用可能な零戦三十機に二百五十キロ爆弾を搭載して敵空母の甲板に体当たりを行わせ、一週間か十日間、その甲板を使用不可能にするという期間限定の特攻を決意した。

大西中将は十九日に、自らマバラカット基地の二〇一航空隊本部（司令山本栄大佐）を訪れ、吉岡忠一少佐（二六航空戦隊航空参謀）、猪口力平中佐（第一航空艦隊主席参謀）、玉井浅一中佐（二〇一航空隊副長）、指宿正信大尉（戦闘三〇五飛行隊長）、横山岳夫大尉（戦闘三一一飛行隊長）に爆装した零戦の特攻隊編制を提案した。

後に、神風特攻隊の名付け親となる猪口中佐は回想録で、この時の戦局について、次のように述懐している。

「栗田部隊が目的とするレイテ湾頭に到達しうるかどうかは、ひとえに、我々は比島にある航空部隊が敵の空母を封殺し得るかどうかにかかっていた。しかし、我々の可動し得る兵力は、引き続く激戦で消耗し尽くし、今や文字どおり一握りの兵力しか残っていなかった。圧倒的な敵に対して、通常の戦術ではほとんど実効を上げないだろうとは、誰の目にも明らかであった。（中略）残された道はただ……。そして先にみたとおり、われわれ一航艦は、特別攻撃によってその要請に答えるべく立ち上がったのである」

開戦以来、搭乗員の自発的行為によって体当たり攻撃が実施されたことはあったが、航空艦隊司令長官の命令によって伝統的な海軍の戦法に反した特攻戦法が実施されるに至ったのは海軍史上において、これが初めてであった。

海軍神風特攻隊の出撃

大西長官から特攻隊の編制を引き受けた玉井副長は、直ちに自分が松山空で教えた甲飛十期生を集めて大西長官の決意を伝えると、彼らは戦死した戦友の仇を討つ好機が到来したと叫んで全員双手を挙げて立ち上がった。続いて、玉井副長は猪口参謀と共に、台南空から転勤したばかりの関行男大尉（海兵七十期）に特攻隊の指揮を打診すると、関大尉は深慮の後「ぜひ、私にやらせて下さい」と明瞭な口調で答えた。

かくして、本居宣長の歌に因んで名付けられた敷島隊、大和隊、朝日隊、山桜隊の四隊（二十五名）からなる海軍神風特別攻撃隊（通称、神風特攻隊）が、ここに誕生したのである。

翌朝、神風特攻隊の四隊とその直掩隊は、大西長官から訓示を受け、翌日から出撃していったが、天候不良のため大和隊の久納中尉と佐藤上飛曹を除いて全機が帰投した。また神風特攻隊は、新たに編制された零戦の菊水隊、若桜隊、葉桜隊、初桜隊及び艦爆の彗星隊を加えた九隊となり、第一神風特攻隊と呼ばれるようになった。

この第一神風特攻隊が初戦果を挙げたのは二十五日午前七時四十分に、サマール島沖海戦で栗田艦隊から攻撃を受けていたトーマス・A・スプラーグ隊（第一群）を救援する護衛空母サンティとスワニーに突入した菊水隊二機と朝日隊一機であった。続いて、マバラカット基地から出撃した関大尉指揮下の敷島隊五機も、午前十時四十九分に、戦艦大和と栗田艦隊の攻撃から遁走したクリフトン・A・F・スプラーグ隊（第二群）の護衛空母キトンカン・ベイ、カリニン・ベイ、ホワイト・プレーズ、セントローに突入した。

この三隊からの特攻攻撃によって六隻の内、一隻が沈没、二隻が大破、一隻が中破、二隻が小破の損傷を受けた。同日に出撃した大和隊と彗星隊は、全機帰投せず消息不明となり、若桜隊は敵を見ず一名を除いて帰投したが、山桜隊は一名を除いて直掩機二機と共に索敵攻撃に向かって未帰還となった。

また二十六日と二十七日には、セブ基地を出撃した大和隊六機の内、二機が空母スワニーに命中している。二十九日には初桜隊三機の内、一機が空母イントレピットに命中、三十日にも葉桜隊六機の内、二機が空母フランクリンと軽空母ベロー・ウッドに命中している。

第二航空艦隊（司令官福留繁中将）の大編隊が正攻法で作戦を行っても、「損失が多く戦果が乏しいのに対して、一航艦の特攻隊は、行き詰まった戦局に光を放った」

「敵側も、当日の壮烈な、しかも極めて効果的であった特攻攻撃を評して、十八インチ砲を搭載している軍艦大和のなし得ないことを、ただ一機の神風機が成し遂げた」と感嘆しているように、特攻攻撃には当初から反対だった福留長官も正攻法の戦法がもはや通用しないことを悟ると、ついに体当たり攻撃の実施を決意した。

第一航艦と第二航艦が合体して第一連合基地航空部隊が編制されると、殆ど全部のパイロットたちが関大尉に続けと眦を決して立ち上がり、続いて第二、第三、第四、第五の神風特攻隊と増援神風特攻隊を編制して二十七日からレイテ湾の米艦船に体当たり攻撃を続行した。

レイテ島に上陸した米陸軍を支援していた米第五十一機動部隊は、連日襲ってくる特攻攻撃に曝されてパニックに陥った。この身の毛がよだつほどの新手の攻撃に恐怖を感じた第三艦隊のハルゼー提督は、「十月末日、正規空母ワスプの搭乗員一一三名の健康診断をしたところ、わずか三十名が戦闘に耐えうる状態で、他は全員過労のため、休養を必要とする状態であった」ため、ルソン島の特攻隊基地を集中攻撃するため作戦計画の変更を余儀なくされた。

陸軍航空特攻隊の出撃

一方、陸軍第四航空軍（司令官冨永恭次中将）所属の第二飛行師団一五六機も、レイテ湾の敵艦船攻撃を続行していたが、兵力の不足から期待する戦果は得られなかった。

このため陸軍も、この難局を打開するため爆装した富嶽隊（四式重爆）と万朶隊（九九式双発軽爆）を編制して十一月七日からレイテ湾の米艦船に体当たり攻撃を開始した。

続いて編制された八紘隊、一宇隊、靖国隊、鉄心隊、石腸隊、丹心隊、勤皇隊、一誠隊、殉義隊、皇魂隊、進襲隊、菊水隊、旭光隊、若桜隊、精華隊、皇花隊、小泉隊も、二十七日から翌年一月十三日にかけてレイテ湾の米艦船に体当たり攻撃を行って大きな戦果をあげた。

この時、フィリピン上陸戦を指揮したマッカーサーは回想録で、「この一連の空襲で自殺攻撃の神風隊飛行士がはじめて本格的に姿を現した。このおどろくべき出現は連合軍の海軍司令官たちをかなりの不安におとしいれ、連合軍艦隊の艦艇が至るところで撃破された。空母群はこの危険な神風攻撃の脅威に対抗するため、もっている飛行機を自分自身を守ることに使わねばならなくなり、そのためレイテの地上部隊を援護する仕事には手が回らなくなったのである」と、当時の被害状況を記している。

この他にも、比島沖では陸軍の海上挺進戦隊と海軍の震洋特別攻撃隊による水上特攻が相当な規模で展開されており、比島攻略の拠点であるウルシー湾にも回天特別攻撃隊による水中特攻が展開されたが、大本営はまだこれらの特攻攻撃を正式の戦法としては採用

していなかったのである。

沖縄に荒れ狂う〝カミカゼ〟

続いて、サイパン島と硫黄島沖でも、十一月二十七日から翌年三月一日にかけて海軍による激しい航空特攻が展開されたが、もはや限定特攻の非常手段をもってしても、戦局の非勢は明確で、日米の航空戦力の格差をカバーすることができないことが明らかになってきた。

「陸海軍共に、昭和二十年二月末日をもって、飛行機搭乗員の教育を中止し、現存する飛行機、教育中の搭乗員を含めて全軍特攻の方針を決定した」大本営は、四月より超非常手段として特攻を公式の作戦手段として導入し、「進んでこれを戦闘方式の主体とするにいたったのである」が、その口火となったのが戦艦大和の特攻出撃であった。

昭和二十年四月一日から六月二十二日まで、八十日間にわたって繰り広げられた沖縄戦は、英国首相チャーチルをして「軍事史上もっとも苛烈でもっとも有名な戦い」と言わしめたように、第二次世界大戦の中で最も苛烈で、最も損害の大きな戦いとなった。

米軍は、沖縄を占領するまでに陸海軍と海兵隊員約五十四万八千人、戦闘艦艇三一八隻、人員揚陸用の舟艇を除く補助艦船一一三九隻を投じたが、これに対して日本軍は陸海軍合わせて七万六千人の部隊と一九〇〇機の特攻機で迎え撃ったからである。

硫黄島が占領された後、陸海軍特攻隊は、三月十八日から沖縄方面に出撃して米海軍の正規空母エンタープライズ、イントレピッド、ヨークタウン、フランクリンなどを次々と撃破した。このため「四月三日ごろには、慶良間列島の泊地には、航行不能になったり、よたよたになった艦艇がどんどん入ってくるようになった」

この時、第五艦隊司令長官レイモンド・A・スプルーアンス海軍大将は、太平洋艦隊司令長官ニミッツ元帥に対して「敵の特攻攻撃は熟練かつ効果的であって、艦艇の損害きわめて大なるため、あらゆる手段をつくして、今後の特攻攻撃の阻止をはからねばならない。よって、第十二空軍をふくむ全航空兵力を動員して、九州および台湾における敵飛行場に、できるかぎりの攻撃を実施するよう進言する」と報告している。

このスプルーアンスの進言によって米軍機は、日本軍の飛行場をかたっぱしから攻撃し、爆弾とロケットで容赦なく粉砕したが、特攻機は広く分散され、巧妙にカモフラージュされていたため、続く特攻攻撃によって慶良間列島の泊地は損傷艦艇で一杯となり、損傷艦艇の群がよろめきながら太平洋を航行していった。

限定特攻から全軍特攻に転じた陸海軍の特攻戦法は、このように終戦まで「マッカーサー元帥、ニミッツ元帥、ハルゼイ海軍大将をはじめとして、アメリカ全太平洋艦隊の将兵を悩ましつづけ、米軍の頭痛の種に」なっていったのである。

特攻の戦果

日本側の統計によれば、昭和十九年十月二十日から昭和二十年八月十五日にかけての約十カ月間に出撃した陸海軍の特攻機は、合計三四六一機（陸軍機一〇九四機、海軍機二三六七機）で、特攻戦死者は、合計四三七九名（陸軍一八四四名、海軍二五三五名）となっている。

一方、回天特別攻撃隊の戦死者は合計八九名で、震洋特別攻撃隊の戦死者は合計一〇八五名であった。陸軍の海上挺進戦隊の戦死者は合計二六五名に及んだ。

戦後、特攻隊の悲劇性が強調されたためか、特攻の戦果は過小評価されているように思えるが、戦後日本の工場などに対する空爆の効果を調査した米国戦略爆撃調査団（USSBS）は、「カミカゼは第二次大戦中に日本の開発した最も有効な兵器であった」と報告している。

また『第二次大戦米国海軍作戦年誌（一九三九―一九四五）』（米海軍省戦史部編纂、出版共同社、昭和三十年）によれば、比島方面での特攻（航空機、桜花、震洋、回天）の戦果は、沈没十六隻（護衛空母二、駆逐艦六、小艦艇四、その他四）、損傷七十隻（護衛空母十三、戦艦五、重巡三、軽巡六、駆逐艦二十二護衛駆逐艦四、小艦艇三、その他一四）で、特攻機の命中率は二六・八％となっており、陸海軍機合計五三五機（陸軍機二〇二機、海軍機三三三機）の内、約一四三機が命中、または至近弾となって戦果をあげている。

一方、台湾・硫黄島方面を見ると、沈没一隻（護衛空母一）、損傷九隻（正規空母四、護衛空母一、駆逐艦一、その他三）の戦果を上げ、沖縄方面では沈没十五隻（駆逐艦八、小艦艇及びその他七）、損傷二〇二隻（正規空母十二、護衛空母三、戦艦九、重巡三、軽巡八、駆逐艦一一六、小艦艇及びその他五十一）の戦果をもたらしている。

以上から全期間中の戦果は、沈没

三十二隻（護衛空母三、駆逐艦十四、小艦艇及びその他十五）、損傷二七八隻（正規空母十六、軽空母三、護衛空母十七、戦艦十四、重巡六、軽巡八、駆逐艦一四二、小艦艇及びその他七十一）となっている。

これらを特攻兵器別に見ると、沈没二十六隻（護衛空母三、駆逐艦十二、その他十一）、損傷二六六隻（空母十六、軽空母三、護衛空母十七、戦艦十四、重巡六、軽巡八、駆逐艦一三八、その他六十七）が一般の特攻機によるもので、桜花によるものは、沈没が合計一隻（駆逐艦一）、損傷五隻（駆逐艦四、その他一）となっている。また震洋の場合は、沈没一隻（その他一）、損傷一隻（駆逐艦一）で、回天の場合は沈没一隻（駆逐艦一）、損傷三隻（その他三）となっている。

以上は、飽くまでも米側の統計資料による特攻の戦果であるが、元海軍中尉の益田善雄氏（元第一〇三震洋隊長）によれば、日本軍による米軍の被害の分類には特攻機と水上特攻が別々に分類され、水上特攻の場合はミゼット・アタックといって、一般の海上戦闘での被害と一緒にしているが、この被害状況は、「暗夜に震洋艇に攻撃をうけて沈められた艦艇があったとしても、米軍は震洋艇だということに気づいていない」ことが多いという。

例えば、「沖縄の第二十二震洋隊の市川兵曹と鈴木兵曹が、特攻攻撃によって沈めた米駆逐艦は、なんとアメリカの記録では低空特攻機による被害」と記入されており、「米軍は夜間、波間をぬって行動する日本軍小型艇の発見がかなり困難で」あったらしく、「日本軍の目標がレーダーにひっかからないので、発見が困難であった」ようだとも述べている。

また益田氏によれば、米側の資料では「米上陸部隊は、震洋艇の攻撃をさけるために防材を海に浮かべ、震洋艇がはいってこられないようにした」ともいうが、実際には「その防材をかわして多くの突撃が決行されたらしく、甲板上の小銃も機銃も、夜、突撃してくる小艇を射つために待機し、じっさいに射撃したが間に合わず、艦船を撃沈された」とも記録されているという。

益田氏が「いずれにしても、震洋の活躍によって、敗北をかさねていた沖縄戦のときでさえ、夜になると制海権の一部が日本側に返ってきた」ため、「米軍の大艦隊および輸送船などは、昼間は沖縄にちかづいて一斉砲撃を加えるが、夜になると沖合に退避してしまった」と述べているように、この調査によって震洋の特攻は、我々の想像以上の戦果を挙げているものと考えなければならないだろう。

別言すれば、最初に通覧した米側の統計は、飽くまでもマクロ的な資料であるため益田氏が指摘しているような米軍将兵の回想録など、ミクロ的な資料も合わせて検討しなければ、特攻隊の真の戦果を図ることはできないだろう。

陸海軍の戦果は、「沖縄戦では比率は落ちて奏功率は十四・七パーセントであるが、機数が多く約一九〇〇機であったから三七九機が戦果を挙げている。十カ月の特攻期間にアメリカ海軍損傷艦の四八・一パーセント、全戦争期間四十四カ月の沈没艦の二十一・三パーセントは」特攻の戦果である。

だが、これらは全て特攻による被害であって、沖縄戦では陸海軍とも同時平行で通常攻撃も実施しているため実際の敵側の被害状況は、これ以上であったことは確かであろう。

元海軍大尉の湯野川守正氏（元神雷部隊桜花隊第三分隊長）は、「戦後気付いたことであるが、沖縄戦では攻撃目標を事前によく検討すべきであったと思っている。当初より輸送揚陸前の船舶と駆逐艦以下の小型艦艇（ピケット艦艇を優先）に目標を絞り特攻を指向したならば、戦果はより拡大され、侵攻兵力に重大な脅威を与えたであろう。

付与される命令も敵機動部隊を対象としたものが多く、また、一つしかない命を賭けるが故に、目標の大なることを希求し空母、戦艦、重巡等を狙った戦士が多かったとみるが、我々はVT信管も知らず艦隊の対空砲火に対する認識が甘かったと思う。戦法の考慮もレーダーと阻止戦闘機が主であった。飛行時間（技倆）不十分、戦場の経験も皆無の搭乗員に対して、適切な任務付与と指導が行われなかったきらいがある」と、特攻戦法の反省点を述べているが、もし、特攻機が駆逐艦（レーダー・ピケット艦艇）や揚陸用船舶（上陸用舟艇など）に集中攻撃を掛けていれば、通常攻撃の戦果も向上させ、沖縄上陸を阻止することができたかもしれない。

現に、敵機動部隊指揮官チェスター・W・ニミッツ提督は五月上旬頃に、米本国統帥部に宛てて「沖縄上陸戦は、日本軍による特別攻撃機による損害がいちじるしいために、上陸を中止して他方面に向かいたし」と暗号電を打っているほどである。

結局、一両日してから統帥部は、ニミッツに「上陸続行せよ」と回答してきたが、このやり取りを見ても分かる

ように、それほど特攻隊の戦闘ぶりは見事だったのである。

連合国軍に与えた特攻隊の物資的、心理的効果

特攻の戦果を見る場合、物質的効果の他に、心理的効果も同時に見る必要があるだろう。例えば、イラク戦争に従軍した米海兵隊員には、テロ攻撃によって心理的なダメージを受けている者が多かったといわれているが、特攻も連合国軍側の将兵の心により深刻な恐怖心を抱かせたことは否定できない事実である。

米第三艦隊司令長官W・F・ハルゼー海軍大将が「日本の特攻機による被害を発表することは、いたずらに味方の士気を喪失させ、敵である日本軍を鼓舞するおそれがある」と述べたことから米軍は、レイテ作戦以来の特攻による甚大な被害によって味方の士気に影響することを恐れ、戦果の公表を四月十二日まで半年間にわたって禁じたほどであった。

特攻の戦果については、戦後の今日になっても、広く世界の人々から賞賛と驚嘆の言葉をもって高く評価されているが、その中から代表的なものを取り上げて連合国軍に与えた特攻隊の物資的、心理的効果を見てみよう。

①**R・L・ウェアマイスター**（米海軍中尉）

「神風は米艦隊の撃滅には成功しなかったが、多大の損害を与えた。在来の戦法ではとてもこんな成果を上げられなかったであろう。日本の飛行機に関する数字が正しいものならば、日本が失った飛行機の十二パーセントで、米損傷艦艇の約七十七パーセント、米海軍人員の死傷者中約八十パーセントをやっつけたことになる。素晴らしい戦果と言えよう。

また神風の特攻があったため、多数の米高速空母がハリツケになったことも、大きな成果のひとつである。もしも神風攻撃がなかったら、これらの空母は、自由に日本本土の基地や工場を破壊することができたはずである」

②**A・J・バーカー陸軍大佐**（英国の戦史家）

「一九四五年〔昭和二十年〕一月五日、フィリピンでの最後の神風攻撃が行われた。‥‥この三ヵ月たらずのあいだに、神風特攻隊は、四二四回出撃して二四九機をうしなった。――そのうちの二三八機は零戦である――これらすべて、パイロットが乗りこんだ爆弾というべきものであった。

米軍の人員及び艦艇に対して、神風機は、恐るべき損害を与えた。しかし、日本人が当時信じていたほどの大きな損害ではなかったが、それでも、恐るべきものであった」

③**バリー・ピット**（英国の戦史・軍事評論家）

「こうした日本軍の特攻戦法を、狂信的だからできたのだとか、まったくムダなことであったと、単純にかたづけることは賢明な考え方とはいえない。

日本軍の特攻攻撃が、いかに効果的であったかといえば、沖縄決戦中、のべ一九〇〇機の特攻機の攻撃で、じつに一四・七パーセントが有効であったと判定されているのである。これはあらゆる戦闘と比較しても驚くべき効率であるといえよう。じじつ、沖縄作戦開始直後の段階では、米軍の海軍士官のなかには、神風特攻が連合軍の進攻阻止に成功するかもしれないと、まじめに、かんがえはじめるものもいたのである」

④**チェスター・W・ニミッツ海軍元帥**（米太平洋艦隊司令官）

「四カ月にわたる沖縄作戦中、残存日本海軍と強力なアメリカ第五艦隊が矛（ほこ）を交えたことは一度もない。だが、我が海軍がこうむった損害は、戦争中のどの海戦よりも、はるかに大きかった。沈没三十隻、損傷三百隻以上、九千人以上が死亡、行方不明または負傷した。この大損害は、主として日本の航空攻撃、とくに特攻攻撃によるものであった」

⑤**レイモンド・A・スプルーアンス海軍大将**（米第五艦隊司令長官）

「特攻機は非常に効果的な武器で、われわれとしてはこれを決して軽視することはできない。私はこの作戦地域内にいたことのないものには、それが艦隊に対してどのような力を持っているか、理解することができないと信じる。それは安全な高度から効果のない爆撃を繰り返しているわが陸軍の重爆撃機隊のやり方と全く対照的である。

私は長期的に見て、陸軍のゆっくりとした組織的な攻撃法をとるやり方の方が、実際に人命の犠牲を少なくすることになるかどうか、疑問に思っている。それは同じ数の損害を長期間にわたって出すにすぎないのである。日本の航空部隊がわが艦隊に対して絶えず攻撃を加えてくるものとすれば、長期になればなるほど、海軍の損害は非常に増大する」

⑥**オルデンドルフ海軍中将**（米第七艦隊隷下砲火支援群）

「航空兵力の増強を考慮されたし。本件は緊急にして、かつ致命的である。わが護衛空母は対空支援には不適当で

あった。日本の自殺機はレーダーの使用困難のため、大した妨害を受けることなく攻撃可能のように見えた……さらに敵飛行場はリンガエン湾付近の小飛行場にいたるまで、常時爆撃して制圧するの要ありと認める。敵の攻撃は朝および夕刻においてさかんであり、とくに午後六時前後において最高潮に達したり。もしさらに損害が加わるならば、今後の作戦に影響するところ極めて大であり、かつ不幸な結果を招来する虞れなしとしない。なおわが損害がさらに甚大とならば、わが指揮下において、準備不充分のまま、日本水上艦艇の攻撃を招致する虞れもなしとしない。敵自殺機はやがて到着するわが輸送船団を攻撃するであろう。その結果は想うだに寒心の至りである。第五航空軍にこの緊急状況を通報し、航空支援の必要を要請されたし。また第三艦隊に当地区にただちに航空兵力を増加し、対空防御を強化するよう請求されんことを乞う。緊急なる現状に鑑み、現作戦方針に対し再考をお願いする」

⑦ジョン・トーランド（米国のノンフィクション作家）

「神風戦法は、レイテ湾をめぐる戦い以来、アメリカ軍に対して試みられてきた。しかし沖縄では、この戦法は防衛戦にとって欠くことのできない、その一部となった。復活祭の上陸作戦以来、島の周辺に集中している数百隻のアメリカ艦船に対して、大がかりな神風攻撃が六回にわたって行われた。この攻撃には一五〇〇機以上が参加した。数百の特攻機が猛烈な対空砲火の弾幕を突破してその目標に当たって炸裂した。そして二十隻近いアメリカ艦船を海底に沈めたほか、約二十五隻に重大な損害を与えた。この数字はそれ自体すさまじいものだが、それでもどちらの側の死と恐怖とヒロイズムのほんとうの物語を伝えるものではない。わが身もろとも敵を吹っ飛ばして地獄に送りこんでやろうと決意したパイロットの操縦する飛行機が、非情に自分の方に目がけて突っ込んで来るのは血も凍るものであった。……沖合では「神風」がすでに輸送船水域を襲っていた。それから十二時間の間に、特攻機一七六機が目標に突入した。LSM―一三五と護衛駆逐艦（ベイツ）が撃沈された。その他四隻が、この攻撃で受けた損傷のため、味方の手で沈めたり、スクラップにしたり、艦籍から除いたりしなければならなかった。これらパイロットの狂信的行為は、アメリカ兵を震え上がらせた」

⑧ジェームズ・F・ダニガン、アルバート・A・ノフィ（米国の戦史家）

「日本側は特攻隊により、敵に損害をあたえることができると確信していたが、その考え方は正しかったようである。戦争の末期、特攻機十五機の損失につき連合軍艦艇一隻に損傷をあたえ、一〇〇機喪失につき一隻撃沈という状況であった。

特攻隊にたいする米軍側の防御は日を追って改善されていったが、それでもなお、特攻は効果的であった。

一九四四年の第一神風特別攻撃隊が出撃したころは、特攻機六機につき一機の割合で命中していた。一九四五年春からの沖縄戦では、至近弾となって、命中しなくても連合軍艦艇になんらかの損害をあたえたのも含めても、戦果をあげたのは九機につき一機の割合となっていた。当時の日本側、連合軍側ともに、多少なりとも戦果をあげた特攻機の割合は十二機ないし二十機に一機であろうと推定していた。……沖縄戦においては戦闘艦艇三二〇隻をふくむ、米英あわせて五八七隻の連合軍艦船を、一九〇〇機の特攻機が攻撃しようとした。日本軍は一回の作戦に、平均約一五〇機を出撃させた。ただし、三五〇機を出撃させたことが一回だけあった。連合軍の戦闘機部隊と対空砲の奮闘にもかかわらず、特攻機の七％がこれをくぐり抜けて艦船に命中した」

⑨トーマース・B・ビュエル海軍中佐（駆逐艦艦長）

『その頃になると、幕僚は間断のない「神風」の攻撃によって、うちつづく緊張から、精神的にも肉体的にも参っていた。日本軍は好んで夕方、明け方、および月明かりからの夜間攻撃を実施したため、幕僚は眠る時間を奪われ、その疲労が増大していたのであった。

ハルゼーは一九四五年五月二十七日の真夜中、沖縄作戦の期間中で最も激しく、最も長時間にわたる日本軍航空部隊の攻撃が行われていた真っ最中に、スプルーアンスと交代した。連続二十四時間以上にわたり、五十六回にわたって行われた日本機一五〇機以上の攻撃によって、アメリカ軍の艦艇十四隻が撃沈され、もしくは損傷を受けたのであった』

⑩ダグラス・マッカーサー陸軍元帥（連合国軍最高司令官）

「硫黄島も沖縄もけっきょく陥落したが、そのために払った犠牲は膨大なものだった。推定死傷者総数は、沖縄では七万五千人以上、硫黄島でも二万二千人近くに達している。沖縄では、大部分が特攻機から成る日本軍の

攻撃で、米側は、艦船の沈没三十六隻、破壊三六八隻、飛行機の喪失八〇〇機の損害を出した。これらの数字は、南西太平洋部隊がメルボルンから東京までの間に出した米側の損害の総計を越えるものである」

⑪**M・T・ケネディ**（米ブラウン大学ジョン・カーター・ブラウン図書館研究員）

『アメリカ軍は、かつてない規模で新たな艦船を建造し、次々と前線に送り込んでいたが、神風による被害は甚大だった。そのためバンカーヒルも、危険な戦闘任務に加わらざるを得なかった。アメリカ海軍は今も、「神風はエセックス級空母を一隻も沈められなかった」と繰り返しているが、これは誤解を招く恐れのある表現だ。実際は、多くの主力空母が特攻隊の攻撃で大打撃を受け、任務から永久に離れざるを得なくなっている』

⑫**リチャード・オネール**（英国のジャーナリスト）

「これは一九四四（昭和十九）年十月二十五日から、翌年一月三十一日までのフィリピンでの戦闘における連合軍側艦船の航空攻撃による被害であり、資料はアメリカ海軍の年表、公式戦史、並びに各種の日本側資料から得たものである。これらの数字は、しばしば食い違いがあるので、完全に正しいとは言えないが、神風攻撃よるアメリカ側の被害は、通常攻撃法による被害の二倍から四倍であった。この神風と通常攻撃法の効果の比較は、ほぼ正しいもので、神風機の攻撃が効果的であったことを証明している」

⑬**『タイム』誌**（一九四五年七月十六日号）

『米海軍當局は昨週更に六隻の米国艦隊が沖縄沖において日本航空隊の命中弾を受け、その中五隻は駆逐艦で死傷四六〇名に達し、五隻の駆逐艦中トウイッブス号及びウイリヤム・ポーター号は撃沈され、ニューカム他二隻は損傷を受けたことを発表した。右六艦の中五隻は特攻機の犠牲であってトウイッブス号のみは雷撃によって撃沈されたものと推定されている。また昨週中英空母三隻、駆逐艦一隻も特攻機の犠牲になり、死傷一〇五名を出した。

さきにウイリアム・ハルゼーは日本航空兵力を嘲笑して「第三級」というよりも寧ろ「第五流」と称し、マーク・ミッチャーは「特攻隊の効果は三％以上を出でず恐るるに足らぬ」といった。然し米国海軍当局発表はこの二提督が事実の前に目を蔽って平静を装っているのだということを示している。

またニューヨーク・ヘラルド・トリビューン紙記者スンタレー・ウッドは神風特攻隊の米国艦隊に与えた損害は米国民の信じているよりもはるかに大きく激烈だという事実を否定する必要はないと断じ、神風特攻隊の脅威を率直に認めている』

⑭**スイス紙**『トリビューン・ジュネーブ』（昭和二十年七月九日付）

「特攻法という組織的戦法は人員と資材において非常に高価なものだが、効果という点からみれば普通の航空機をはるかにしのぐものがある。日本特攻機は五月二十四日に最も猛烈な攻撃を沖縄沖の米艦船に加え、この攻撃で操縦士一一一名を喪失したが、米側は合計一一隻の艦船を撃沈されている。沖縄戦における米海軍だけの兵員喪失数はニミッツ司令部の発表によっても九千名に上り、米海軍は非常に大きい損害を被ったため、第三艦隊は第五艦隊と交代しなければならなかった」

⑮**ベルナール・ミロー**（フランスのジャーナリスト）

「アメリカ海軍将兵のあいだに不安がひろがりはじめ、それは急速に顕著な様相を呈するにいたった。いままでの連戦連勝でつちかわれた優越感と、そして圧倒的な物的優位からくる安心感も、いまは無力化しつつあった。彼らの日頃の傲慢さはしだいに影をひそめ、かわって恐怖と、虚脱と、無力感がしのびよってきていた。‥‥アメリカの水兵たちは不眠になり、神経質になり、荒んだ気持ちにならされていった。何も生じていないときでも、彼はまるで操り人形のようにぎこちない身ごなしで作業をした。いったん狂燥と過熱の事態になると、彼らは狂気のようになって操艦や射撃にありったけの力をふりしぼり、それ故に力を出しきって心理的にも体力的にも参ってしまった。しかもその虚脱の中でなお彼らは不安でおびえていた。

このような心理状態は、また戦意に重大影響を及ぼすものである。この時期アメリカ兵の士気は、少なくとも海軍だけではかなり衰えていたといってよい。‥‥要するに増していく物的人的損害による不安な現状に加えて、アメリカ海軍は乗組員の心理状態においても、この時期には由々しい局面に逢着していたのである」

⑯**ハンソン・W・ボールドウィン**（米国の従軍記者）

「四月末になっても、菊水特攻隊の作戦は衰えをみせなかった。この恐るべき死闘は、なお二カ月間も続くのである。‥‥四月以後になると、これほどの艦船の沈没、損傷の危険は二度となかった。五、六両月を通じて、沖

縄の戦いは徐々に爆弾対艦艇の戦闘から人間対人間の意志と耐久力の試練に変わっていた。

毎日が絶え間ない警報の連続だった。ぶっつづけに四十日間も毎日毎日、空襲があった。そのあとやっと、悪天候のおかげで、短期間ながらほっとひと息入れたのである。ぐっすり眠る、これがだれのもの憧れになり、夢となった。頭は照準器の上にいつしか垂れ、神経はすりきれ、だれもが怒りっぽくなっていた。艦長たちの眼はまっ赤となり、恐ろしいほど面やつれした。敵の暗号を解読し、その意図を判断する、海軍の〝マジック班〟の活躍によって、艦隊は敵の大規模攻撃を正確に予測することができた。時には攻撃前夜に、乗員たちに戦闘準備の警報がラウドスピーカーで告げられた。しかし、これはやめねばならなかった。待つ間の緊張、予期する恐怖、それが過去の経験によっていっそう生々しく心に迫り、そのためヒステリー状態に陥り、発狂し、あるいは精神耗弱状態におちいったものが何人かあったからである」

⑰**アルバート・カフ**（UP通信記者）

「カミカゼ特攻隊はたしかに大きな損害を米軍に与えた。そしてカミカゼのパイロットたちが、勇敢な人たちであったことは疑いがない。そしてアメリカ兵が〝カミカゼ〟を恐れ、怖がったことは否定できない。実際、パニックが起こりかけていた」

以上の証言からも分かるように、日本軍の特攻戦法は、敵の艦船や部隊に物質的な打撃を与えたばかりだけでなく、連合軍の将兵の心により深刻な恐怖心を与えたことは否定できない事実であろう。

世界が尊敬した特攻隊

先述したように敵側は、日本軍の特攻戦法が味方の艦船や部隊に物質的な打撃を与えたばかりだけでなく、連合軍の将兵の心にも、より深刻な恐怖を与えたことを認めているわけであるが、キリスト教が自殺を否定しているせいか、中には敗者の自殺戦法であるとか、「カミカゼは最高の文明の武器をもってする最低の文明の手段であった」と酷評する者がいることは残念である。

だが、彼らの中にも、次のように特攻隊員の自己犠牲の中に、「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」（ヨハネ伝」第十五章十三節）と説いたキリストの教えと同じ価値観を見出して賞賛の言葉を与える者がいるのである。

恐らく日本軍は、敵からこんなにも畏敬の念を持たれるとは夢にも思わなかったに違ない。特攻隊を賞賛した言葉は夥しいが、その中で最も代表的な例を挙げてみよう。

①**アンドレ・マルロー**（フランスの作家、文化大臣）

「日本は太平洋戦争で敗れはしたが、そのかわり何ものにもかえ難いものを得た。それは、世界のどんな国にも真似のできない特別攻撃隊である。スターリン主義者たちやナチス党員にせよ、結局は権力を手に入れるための行動であった。日本の特攻隊員たちはファナチックだったろうか。断じて違う。彼らに権勢欲とか名誉欲などはかけらもなかった。祖国を憂える貴い熱情があるだけだった。代償を求めない純粋な行為、そこにこそ真の偉大さがあり、逆上と紙一重のファナチズムとは根本的に異質である。人間はいつでも、偉大さへの志向を失ってはならない。

戦後に、フランスの大臣としてはじめて日本を訪れたとき、私はそのことをとくに陛下に申し上げておいた。

フランスは、デカルトを生んだ合理主義の国である。フランス人の中には、特別攻撃隊の出撃数と戦果を比較して、こんなにすくない撃破数なのにな ぜ若いいのちをと、疑問を抱く者もいる。そういう人たちに私はいつもいってやる。『母や姉や妻の命が危険にさらされているとき、自分が殺られると承知で暴漢に立ち向かうのが息子の、弟の、夫の道である。愛する者が殺られるのをだまって見すごせるものだろうか?』と。

私は、祖国と家族を想う一念から恐怖も生への執着もすべて乗り越えて、いさぎよく敵艦に体当たりした特別攻撃隊員の精神と行為の中に、男の崇高な美学を見るのである」

②**バリー・ピット**（米国の戦史家）

『日本軍の神風特攻精神を狂信的だといって非難することは簡単だが、この考え方は、いささか独断的すぎるのではなかろうか。

特攻機や「桜花」爆弾に搭乗して連合軍艦船の甲板めざしてとびこんでいった日本の〝若鷲〟たちは、その目的の正しさを信ずるがゆえにとびこんだのであり、その目的をすこしでも達成することをねがったがゆえにこそ、よろこんで生命をささげようとしたのである。

軍人としての義務をまっとうするため、勇敢に、おのが生命を捨ててかえりみない、尽忠至誠の発露でなくて、なんであろう』

③**A・J・バーカー陸軍大佐**（英国の戦史家）

『連合軍では、このような攻撃を非人道的、狂信的としながらも、神風特別攻撃隊員たちにたいしては、尊敬をはらっているのである。それはおそらく、かれらが特攻攻撃で手いたい打撃をうけたためであろう。

だが「回天特攻隊」のばあいには、連合軍にあたえた打撃の程度はわずかであったにもかかわらず、同様の尊敬をかちえているのである』

④**ダニエル・H・ディソン**（フィリピン神風戦没者協会設立者）

「私たちは、彼らの偉業を引き継いでいかなければならないと思います。戦争のためではなく、忠誠心、愛国心、祖国への愛のためです。東洋、いや全世界の人々が、この神風特攻隊の話から何か大きなことを学べると思います。

神風特攻隊の隊員は、全世界そして次世代の全人類のために、彼らの人生を記録として残してくれたのです。彼らは自分の命を生きている偉業としてささげ、人間はどこまで自国を愛することができるか、ということを提示してくれました」

⑤**ジョン・トーランド**（米国のノンフィクション作家）

『「われわれ西側の物の考え方とはこんなにも異質な光景には何か催眠術にでもかかったような恍惚感がありました」と、C・R・ブラウン海軍少将は述べている。……このほとんど病的な恍惚感から、いろいろな説やうわさが生まれた。「沖縄」のパイロットは、僧侶のような頭巾のついたころもを着て戦場にむかうのだとか、麻薬を使われているのだとか、操縦室に鎖でつながれているのだとか、年少のころから自殺のため訓練を受けたエリート・グループだとかいうものだった。だが、実際は、彼らはごく普通の日本の若者で、志願して特攻隊に入ったのだった。彼らの目的は、意義のある死に方をすることであった。特攻方式が、アメリカに比べて劣勢な日本の生産性を克服するための最善の道であると、彼らは確信していた。たった一人で、空母や戦艦を撃沈もしくは撃破することができ、千人の敵を道連れにすることができるのである』

⑥**ベルナール・ミロー**（フランスのジャーナリスト）

「日本人の自殺攻撃法が、考え方の上では太平洋戦争中に突然生じたものでなく、この国の過去にさかのぼって、以前から存在していた考えをここで実行に移したものであることは、既述したところであるが、日本の歴史をひもとくならば、このような攻撃の発生したことも驚くには足りないことが分かる。実際、これは十分にあり得ると予測できたできごとである。英雄的行為の先例が、後世の日本人に与えた影響はきわめて大きいが、また日本人の気質としてそういったものに特に深く感動しやすかった。日本の軍隊の長い歴史には、そのような英雄的行動や、従容として自己犠牲の途を選んだ実例が、目白おしにひしめいているのである。戦時中の日本人はそれらの先例に考えを借り、論理的に、そして自然にその道へと歩んだのであった。今日の日本人の気質は非常に変わってしまい、かつて鼓吹されていた宗教的な、あるいは祖国愛的な感情といったものをすっかり忘れはてているかのように我々は思うけれども、なおかつての日本人のこの勇気と犠牲的精神は、尊敬をもってそれを是認しないわけにはいかないものがある」

⑦**スイス紙『トリビューン・ジュネーブ』**（昭和二十年七月九日付）

「戦争では殺されずに人を殺すということが常識だが、死を覚悟、死を喜ぶことが最大の効果を発揮することがある。破壊せんとする目標物に時速千キロの速度で突入する操縦士は危険この上もない、しかし尊敬すべき敵だ」

特攻隊員を憐れむ人たちへ

NHKは、平成二十一年八月九日から十一日にかけて「NHKスペシャル日本海軍四〇〇時間の証言」（合計三回）を放送した。この番組は戦後、旧海軍関係者の間で開催された「海軍反省会」で録音されたテープをドキュメント風に作成したものである。

「海軍反省会」とは、昭和五十一年から平成三年までに一三一回、総計四〇〇時間に亘って、ほぼ毎月のように「水交会」で開かれた元海軍のエリート将校たちによる秘密会議であり、そこでは主に海軍の失敗について議論された。

この番組の第二回目の放送（八月十日）では、「特攻〝やましき〟沈黙」と題して特攻攻撃を議論した録音テープが放送されたが、その内容たるや、生還の道のない方法は、とるべきではなかったとか、負け戦が分かっていて特攻作戦をなぜやったかとか、海軍を毒したのは特攻作戦だったなど反省ともいえない、自虐的な責任のなすり合いだけが行われているだけであり、祖国を守るために散った若き特攻隊員の崇高な殉国の精神や特攻の戦果に対する評価は殆ど議論されることはなかっ

た。

戦後、戦争に対する批判と並行して「特攻に殉じた若者たちの至誠とその行動にさえ、批判的な言辞を弄する風潮」があった。若者たちを死所に追いやった者たちへの批判は大いにあってもよいだろうが、特攻に殉じた若者たちへの批判だけは絶対に許されてはならないことはいうまでもないのである。

もし、特攻に殉じた若者たちを批判する風潮がいつまでも放置されているならば、特攻に散った英霊たちは永遠に犬死になってしまうだろう。

日本は確かに特攻の善戦も空しく、敗北したかもしれないが、そのかわり「何ものにもかえ難いものを得た。それは世界のどんな国にも真似のできない特別攻撃隊である」と、フランスのアンドレ・マルローは言っている。

またベルナー・ミローも、「日本の英雄たちは、この世界に純粋性の偉大さというものについて教訓を与えてくれた。彼らは千年の遠い過去から今日に、人間の偉大さというすでに忘れられてしまったことの使命を、とり出して見せつけてくれたのである」と述べ、特攻隊員の自己犠牲の姿に敬意を表している。

彼らが言っているように、例え「特攻の戦果がいかようであろうとも、特攻機とともに、南の海に、空に散った特攻隊員の崇高な殉国の精神は、民族の存する限り、忘れてはならない」のである。

幕末の安政の大獄で処刑された吉田松蔭は「死生観」の中で、「志士の死生観は生の中に死があり、死の中に生がある。死と生は無縁の存在ではない。命を長らえて何もしない者は死んだものと同然である。若くして命を落としても志が高ければ、かならずその志を受け継ぐ者があらわれ続けるものである」と説いているが、特攻隊の生みの親である大西瀧治郎中将も、次のように特攻隊の意義を新聞記者に語っている。

「明治維新の戦争のなかで、会津藩が敗れたとき、少年のグループ白虎隊が最後まで戦った。一つの藩の最後でもこうだ。ここで青年が起たなければ、日本は滅びるだろう。青年たちが国難に殉じて、いかに戦ったかということを歴史が記憶している限り、日本と日本民族は滅びることはない」

この大西中将の言説は、いまもなお、その輝きを放って我々に生きる勇気を与えてくれるのであるが、外国人の中でも、大西中将の真意を最も正確にくみ取っているのが、次のM・T・ケネディと初代ビルマ首相のバー・モウであろう。

①M・T・ケネディ（米ブラウン大学ジョン・カーター・ブラウン図書館研究員）

「アメリカの若者は、戦争中のアメリカ軍人の犠牲は、アメリカの自由を守るために必要だと教えられている。日本軍の上層部が敗北を充分に認識した上で大勢の若者を神風特攻隊に任命したのは、絶望的な大義のために命を捧げた若者たちの倫理規範が、以後何千、何万年と、人々の自己犠牲精神をかき立て続けるであろうと考えてのことだった。彼らの最後の望みは、未来の日本人が特攻隊の精神を受け継いで、強い心を持ち、苦難に耐えてくれることだった。

現代を生きる私たちは、神風特攻隊という存在をただ理解できないと拒絶するのではなく、人の心を強く引きつけ、尊ばれるような側面もあったのだということを、今こそ理解すべきではないだろうか」

②バー・モウ（初代ビルマ首相）

「私は日比谷公会堂での大衆集会で演説した。……ここで、われわれの最終的勝利を確信している私の第三の理由をあげよう。それは、全世界を驚かせたあるもの、われわれの東アジア革命の基本的精神と意義とを示しているあるもの、すなわちカミカゼの精神である。それは、新しい東アジアの真の基礎となりつつあり、いかなる敵も撃ち破ることのできない甲冑で武装された自己犠牲の精神、生か死かの精神、勝利のために死をいとわない精神である。私は台湾とフィリピンでの神風の偉業を読んだ時ほど、こころを動かされたことはかつてなかった。その時、私は神風の精神が滅びない限り、東アジアも決して滅びない、と自らに語った」

元海軍中佐の中島正氏（元二〇一空飛行長）は、大西中将は海軍の伝統から見て「特攻隊編制は統率の外道」と言ったと述べているが、これに対して元海軍大佐の奥宮正武氏は昭和五十四年に、日本駐在武官のブラジル海軍大佐ゲレット・T・マルチンスから「カミカゼは軍隊における統率の極致である、と私は考えている。第二次世界大戦後、欧米の諸国では、いずれも、軍隊の指揮について問題をかかえている。そこで、私はカミカゼについて詳しく知りたい」と言われたと述懐している。

では、マルチンス大佐は、なぜカミカゼを統率の極致だと考えたのだろうか。それは、将兵の士気を特攻まで高

めた日本軍の統率力に感銘したからに違いない。

いつの時代であれ、どこの国であれ、国難に直面した際には祖国のために、いつでも死ねる覚悟と勇気を持った人間が現れてきたからこそ、その国は守られてきたのであるが、戦後の日本では、戦時中の特攻作戦には前例がなかったことから「特攻を最大の罪悪の一つと見立てて、絶対服従を強要する上司の命令のために、いやいやながら死んでいった若い将兵たち」という誤った見方が生まれ、彼らを憐れむ風潮があったことは実に残念なことである。

戦後、「特攻は上層部がやらせた」という批判が生まれたが、先に述べたように、帝国海軍では伝統的に「必死必中」の作戦を実行しないのが慣例であった。だが、「現実の戦局は、戦力の量と質の格差が圧倒的となってきて到底歯が立たず、敵に近づくことすらできない状態」だった。こうした中で「本土侵攻を防ぎ止める手段は、もはや我が身を弾丸に代える体当たり攻撃しかない」というのが、当時の若人の脳裏を支配した客観情勢であったろう。

元海軍大尉の小灘利春氏（元全国回天会会長、元特攻隊慰霊顕彰会評議員）も、『このまま、日本がなすところなく艦艇、航空機の消耗を続けてゆけば、米軍は日本沿岸の何処にでもやすやすと上陸できるのである。

本土が戦場になれば日本民族の大量殺戮、国土の破滅となることは目に見えている。「何とかして、敵軍の侵攻を食い止める手段はないものか。桶狭間の大逆転を打つ新戦法、新兵器はないのか」。私は日夜焦燥に駆られていた』と、当時の心境を語っている。

作家の保坂正康氏が「特攻作戦は現場の指揮官や現実に戦争指導を担っている中堅幹部の間から起こり、それがやがて軍事指導者の黙認、ないし奨励へと進んだと考えるべきではないかと、私には思える」と述べているように、「特攻案」は、こうした不利な戦況の中で、現場の将校や下士官から戦況の挽回を期して上申されてきたものであり、それが人間魚雷「回天」であり、人間爆弾「桜花」だったのである。

最初、海軍の上層部は「特攻案」を止めていたが、彼等の国を思う熱き情熱が当初から余り乗り気ではなかった上層部を動かしたというのが真相である。

小灘氏によれば、人間魚雷「回天」は当初、艦政本部が従来の海軍の伝統によって僅かでも生還の可能性があるものではないと認めなかったので、「搭乗員が生還できるよう、最後の突撃を前に脱出する装置をつけることが、試作許可の段階から前提条件となっていた」が、「考案された各種の方法がうまくゆかず、そのために兵器採用が大幅に遅れたので、搭乗員側の強い要求によってついに脱出装置は見送られた」のであった。

小灘氏が「途中で艇から下りたのでは、確実に命中するかどうかわかったものではありませんから、たとえ脱出装置があっても、実戦で私どもは使うことはなかったでしょう。命中しなければ、大事な時期に自分というものが国土、国民を護る役に立たないのです」と述べているように、「特攻は上層部がやらせた」という見方は誤りであり、現場からの要求によって上層部が条件付きで承認したのが真相である。

世界の戦史において、日本のように多くの若人が国を救うために「特攻」に集まり、組織的、長期的に、それを実行した民族、国家は他に類を見ないであろう。

だが、ごく短い期間ではあるが、大戦中、ソ連とドイツの空軍によって特攻作戦が展開された例があるのである。

ソ連とドイツの特攻隊

例えば、昭和十六年六月に、ソ連軍の特攻隊がドイツ軍の猛進撃を阻止するためドイツ軍爆撃機および機甲部隊に体当たりを敢行しており、「その八名の勇士の名は、ソ連邦英雄としてソ連のほとんどの戦史書に載せられている」

またソ連戦闘機ポリカルポフI－16がドイツ軍爆撃機に近づいてプラペラで尾翼を切る作戦を展開しており、これに対抗して昭和十八年の終わり頃にドイツ軍も同じような作戦を展開している。

一方、昭和十九年十月二日、ラムヤガー戦闘機戦隊五〇〇機は、レイヒに来襲した米第八空軍のB－17爆撃機編隊千機に体当たりを敢行し、爆撃機の編隊の中で爆弾を爆発させてパイロットは直前に、パラシュートで脱出している。

米軍資料によると、この作戦の戦果は、「重爆撃機四十機が失われ、その内近接体当たり攻撃によるものは二十四機となっている。体当たり攻撃の中には、Wener Gerth大尉のように、体当たりの後、パラシュートが開かず、B－17とともに墜落したという例もある」

ナチス宣伝相ゲッペルスは、その著書『ラムヤガーは、今攻撃中である』（昭和二十年三月三十一日刊行）で「九十％の戦死を覚悟し、しかし、おおきな成功を期待して、ラムヤガーは戦った。四月四日の戦闘では、一二〇機のラムヤガー隊が、重爆撃機千機と護衛戦闘機八〇〇機に攻撃をかけ、少なくとも八機の重爆撃機を体当たりにより撃墜している。この戦いで七十七名が戦死し、二十八名はパラシュートで無事降下した」と記している。

またドイツが降伏する一カ月前の昭和二十年四月七日に、日本の神風特攻隊に触発されたドイツ空軍の「エルベ特別攻撃隊」約一〇〇機が、ドイツ北部ガルデレーゲン上空で米軍の爆撃機に体当たりを敢行して約八十人が戦死・行方不明となっている。

欧米人の自発的な体当たり攻撃

英国の史家ハミルトンが「戦争は人間の最高道徳を現す」と謳ったように、大戦中には世界の至る所で身の危険を顧みず、難におもむく自己犠牲の姿が見られた。前出の小灘氏は特攻ではないが、次のような欧米人の自発的な体当たり攻撃を伝えている。

第一次大戦のさなか、フランスの首都パリを空襲したドイツ軍の新兵器ツェッペリンを迎え撃ったフランス空軍の新鋭戦闘機「モラール・ソルウニエ単葉」一機が飛行船を狙って小型爆弾を次々と投下したが外れてしまった。

「武器を使い果たした戦闘機の操縦士は、堪りかねたのであろう、急降下してこの飛行船をめがけて突入した。水素ガスを満たして空中に浮かぶ飛行船は大爆発を起こし、火だるまとなって墜落した」

一方、昭和十九年十二月二十六日、重巡洋艦「足柄」が軽巡洋艦「大淀」及び駆逐艦六隻と艦隊を組んでフィリピン・ミンドロ島サンホセ市に上陸した米軍の大部隊を急襲した時、陸上基地から発進した一機の双発単座戦闘機P－38が「足柄」に向かって機首の四挺の十三ミリ機銃を撃ち続けながら、そのまま左舷に突入した。この体当たりで、「機体が後部兵員室の中に飛び込み、航空燃料と装備弾薬のために大火災になった」

米軍機の自爆で四十七名の戦死者を出した「足柄」は、傷つきながらも十分な戦果を挙げたが、引き揚げる途中で米軍操縦士の遺体を丁重に水葬し、その壮烈な最期に、同じ軍人として敬意を表したのである。『仲間の戦死者と同じく、「足柄」乗組員全員の敬礼を受けて、毛布に包まれた彼の遺体は南の青い海に沈んでいった』

『たとえ被弾していても、負傷しても、すぐ近くに味方の飛行場があるので、帰れば自分は助かる。水面に不時着してもよい。それなのに、この米人パイロットは日本の神風特攻機と同じ行動をとったのである。

この二つの例は、味方の危機に遭遇して「これが今の自分の取るべき最善の手段である」ととっさに判断して、体当たりを敢行したものと思われる。

人間ならば誰でもこのように、自分の身を捨てても、人の命を救い、危機にある味方を救う行動に出るであろう。川に落ちて溺れかかった子供を見た人が、その子を助けるために、危険を冒してでも飛び込んで助けるのと同じである。それが人の自然である』

元海軍大佐の安延多計夫氏も、次のように体当たり攻撃は、追い込まれれば誰でも最後には採る万国共通の戦法であると述べている。

『山本五十六元帥を撃墜した戦闘機隊指揮官ジョン・W・ミッチェル陸軍少佐は、出撃前に、上司のL・S・ムーア中佐から「いかなる犠牲を払っても、元帥の飛行機を撃ち墮とせと命ぜられた。

この命令は、最後の手段としては、体当たりしてでも、任務を完遂せよとの意味をふくんでいたのである。最近某氏がこのことをミッチェル少佐に質問したときに、「万が一、射撃で元帥の飛行機を射ち洩らしたとしたなら、私は体当たりしたかも知れない」と答えている。

最後の攻撃法として、捨身の戦法は、われも敵もとったところである。人として、誰が死なんと願う者があろうか。ただ自分の生に対する愛着よりも、国を愛する熱情が、さらに強いから、よろこんで身を捨てて、任務のために、国のために、一死もって最後の活躍をしているのである。これは実に非情であり、無慈悲にみえるが、これが戦いというもののすがたなのだ』

命を超える価値とは何か

帰ることのない特攻戦法は、確かに戦闘手段としては「外道」であるかしれない。だから特攻を「無謀で狂気」と言うのは簡単である。だが、特攻隊員の中に、死にたくて死んだ者は一人もいないはずである。特攻は自分に原因があって、死にたくなって死ぬ自殺とは根本的に違うからである。

小灘氏は、『特攻は、心身ともに健全な若人が「ほかの、多くの人々を救うための愛の行動」であり、大いなる

ものへの文字通りの献身であった。人間の根幹に基づく徳性と言えるであろう。

「自分さえよければ」というエゴイストには、特攻はできることではない』と述べているが、「必死必中」の特攻が特攻隊員にできたのは諦観からではなく、自分の命を賭けてでも護らなければならない価値があったからであろう。もし、そうでなければ、誰も身を捨ててまで護ろうとはしなかったはずである。

人間魚雷「回天」の発案者、黒木博司大尉が詠った次の辞世の句は、一身を捧げて死んでいった特攻隊員の気持ちを端的に表していると思う。

「人など誰か
　かりそめに
　命すてんと望まんや
　小塚原にちる露は
　止むにやまれぬ大和魂」

「日本再生」とは何か

戦前の日本は、外国人が賞賛するほど尊い国であった。だが、現代の日本に命を賭けてでも護らなければならない価値が果たして存在するだろうか。

数年前から、食品偽装問題、凶悪事件の頻発、社保庁の年金記録の改竄、公務員、教師、政治家の不祥事などが起こり、日本人のモラルの崩壊が叫ばれるようになってきたが、このように堕落した国を一身を捧げてまで誰も護りたいとは思わないだろう。

では、日本は、どうしたら一身を捧げてまで護りたいと思える国になるだろうか。

元ＮＨＫアメリカ総局長で、四十年以上に亘って日米関係を見てきた米ハドソン研究所主席研究員の日高義樹氏は、その著書で「アメリカの人々が日本を恐れているもう一つの理由は、神風特攻隊である。日本の国と人々を守るために、死ぬのを承知で体当たり攻撃をしかける日本の兵士たちの存在は、アメリカ人にとっては理解不能で、そのため心から恐れた」と言っている。

また日高氏は平成二十三年十月二十一日に、東京で開催された「ジャーナリスト五十周年」記念のパーティで「日本が世界から尊敬されているのは、物作りが上手いからでもないし、お金を沢山持っているからでもありません。日本という国そのものが尊敬されているのです」と言ったが、その意味は、日本が神風特攻隊を生み出した国だからであり、シンガポール首相のゴー・チョクトンが一九九二年二月十一日に開催された国立博物館戦争展の開会式で述べたように、大東亜戦争によって「アジアの植民地が全て解放された」からだと思う。

日本人は、かつて日本が西欧列強に対して捨身の一撃を加え、アジアを西欧の植民地支配から解放した国であり、世界から尊敬される神風特攻隊を生みだした国であることに対して、もっと大きな自信と誇りを持つべきなのである。

日本人が大東亜戦争の世界史的意義を再評価し、東京裁判がもたらした誤った歴史認識から脱却し、失われた自信と誇りを取り戻すことが、「日本再生」の一番の近道でないかと思うのである。もし日本人に、それができたならば、再び日本が国難に直面しても、かつての特攻隊員のように、この国を護るために、いつでも死ねる覚悟と勇気を持った者が現れてくるはずである。

著者プロフィール

昭和34年北海道生まれ
平成12年北海道大学大学院修了
同年９月より中国社会科学院研究生院留学
平成14年より旭川大学地域研究所特別研究員
専攻は中国経済論及び中国現代史。
その他、大東亜戦争の開戦原因と特攻の戦果を研究中。
吉本貞一陸軍大将（昭和20年９月14日、市ケ谷で自決）は親類。

「編注・本稿は、中川先生が現在研究、執筆中の『大東亜戦争の開戦原因と特攻の戦果』に関する論考の一部ですが、特に特攻の戦果について、『第二次大戦　米国海軍作戦年誌１９３９～１９４５』（出版共同社、昭和30年）等を基に、海図を使って損傷を受けた米海軍艦船の位置等を正確に割り出す等、詳細な検証を続けておられ、いずれ特攻マップを折り込んだ研究成果を発表されるものと期待されます。」

平成23年度 フィリピン特攻基地慰霊祭に参加して

評議員　及川　昌彦

昨平成23年10月24日（月）から27日（木）まで3泊4日の日程で、毎年、フィリピン・マバラカット町主催により、クラークフィールド・リリーヒルで、10月25日に催行されている日比合同の特攻隊戦没者等慰霊祭（現地では「世界平和祈念式典」と呼称している。）に、当顕彰会代表として杉山蕃理事長と共に参加し、その後関係の慰霊碑等を巡拝いたしました。

今回、当顕彰会企画の巡拝ツアー参加者は8名で、最年長者は85歳の野村知治氏（陸士59期）、最年少者は、伯父さんがフィリピンで戦死されている45歳の金澤達也氏でした。

マバラカットの慰霊祭は、1998年（平成10年）から毎年催行され、今回で14回目になります。関行男海軍大尉（海兵70期）が率いる神風特攻隊・敷島隊の出撃時間に合わせて、午前7時過ぎからリリーヒルの平和公園内にある観音像前で始まりました。その模様については、翌10月26日付けで地元の日系新聞「日刊・まにら新聞」の第一面にも大きく掲載されましたので、後ろに添付します。

式典は、日比両国国歌の吹奏に始まり、モラレス町長の式辞、来賓の挨拶の後、参列者一同で「海ゆかば」を斉唱し、最福寺関西別院（兵庫県西宮市）の鮫嶋勇明住職ら日本人僧侶3名が読経する中、参列者一同が観音像前で焼香して終わりましたが、今回は、病状が心配されていたダニエル・ディソン氏（81歳）も参列されました。

当顕彰会の献花

中央モラレス町長、その左杉山理事長、一人おいて筆者、右端より二人目ディソン氏

慰霊祭終了後は、次の慰霊碑等を巡拝しました。

・マバラカット西飛行場跡（敷島隊初発進基地慰霊碑）
・東飛行場跡（カミカゼ神社）
・大西神社（第一航空艦隊司令部跡・大西瀧治郎平和記念碑）
・ダニエル・ディソン氏宅（カミカゼミュージアム）

最終日には、在比日本大使館を表敬訪問し、最近のフィリピン情勢などを伺いながら歓談しました。

今回の訪比ツアー参加者

杉山　蕃（理事長・防大4期）
野村　知治（陸士59期）
本間　尚代（曙光会事務局長）
※曙光会はフィリピン戦従軍者と戦没者遺族の会）
武谷　孝生（遺族）　田村　智亮
明村　宏　金澤　達也（遺族）
及川　昌彦（評議員）

ディソン氏宅カミカゼミュージアムにて　左ディソン氏・右筆者

なお、今回の最年長参加者である野村知治氏より、慰霊祭参列に関する漢詩を頂きましたので、後ろに掲載させていただきます。野村氏は、陸軍航空士官学校59期生で、満洲で訓練中に終戦となり、3年間シベリアに抑留された後帰国、航空自衛隊に入隊し、司令官として活躍されました。

また、最年少参加者である金澤達也氏は、伯父様が第一航空艦隊配属で、当時フィリピンから出された書簡が残っており、それには、これから出撃するとあり、伯父様の最後の出撃基地を是非この目で確認したいと思い、今回思い切って有給休暇を取り、参加したとのことで、今回は、杉山理事長から貴重なお話を拝聴できて大変有意義な旅行であったとのことでした。

○比島神風特攻隊慰霊祭参列

野村　知治（陸士59期）

九紫彼方零戦征
　九紫の彼方に零戦は征く
住民称賛英雄行
　住民は称賛す英雄の行と
擲生国尽是人鑑
　生を擲って国に尽くす
　是ぞ人の鑑なり
安睡英霊名永晶
　安らかに睡り給え英霊よ名は
　永えに晶かん

第6928号　The Daily MANILA SHIMBUN
2011年（平成23年）10月26日（水曜日）

特攻隊出撃地で慰霊祭

比日両国の約150人参列

パンパンガ州

太平洋戦争末期、神風特別攻撃隊が出撃したルソン地方パンパンガ州クラーク特別経済区内の平和公園で25日、戦没者慰霊祭があり、比日両国の関係者や地元住民ら約150人が戦争犠牲者の冥福と世界平和を祈った。慰霊祭は1998年から毎年開かれ、今回で14回目。イスラム反政府勢力と国軍の軍事的緊張が高まる状況下で開かれた今年は、紛争の平和的解決を式辞で呼び掛ける発表もいた。

戦時中、同経済区内には旧日本軍飛行場があり、66年前の1944年10月25日、同飛行場やセブ、ダバオから出撃した特攻機がビサヤ地方レイテ島沖などで米空母に体当たり攻撃を敢行した。

慰霊祭は特攻機の出撃時間帯に合わせて午前7時すぎ、平和公園内の観音像前で始まった。比側からは、98年に「世界平和の町」を宣言した地元マバラカット町のモラレス町長やクラーク開発公社のパンリリオ副総裁、空軍関係者、先住民族アエタの子供たち約20人らが出席した。日本側の出席者は、比戦没者の遺族や公益財団法人の特攻隊戦没者慰霊顕彰会（杉山泰理事長）、医療法人徳洲会の関係者ら。

モラレス町長は式辞で「私たちは戦争の悲劇と恐ろしさを思い起こし、世界が安全で平和になるよう祈るため、年に一度、ここに集っている」と慰霊祭の意義を強調。パンリリオ副総裁はバシラン州などで相次いだ武力衝突に触れながら、「特攻機出撃の地となったクラークは平和の大切さを伝える歴史的場所。ここから、対話による平和的な紛争解決を呼び掛けたい」とあいさつした。

続いて最福寺関西別院（兵庫県西宮市）の鮫嶋勇明住職（45）ら日本人僧侶3人が読経する中、参列者が観音像前で焼香した。

慰霊祭には、少年期に特攻隊員と接した経験があるマバラカット町の郷土史家、ダニエル・ディソンさん（81）も参列した。「陽気な若者だった隊員の様子が出撃決定後は一変した。どこか遠くを見つめているような姿が脳裏に焼き付いている」と当時を振り返りながら、「日本国内で批判的な意見があるのは承知しているが、隊員らの忠誠心と愛国心は称賛に値する。わが身を犠牲にして全力を尽くす『神風精神』と規律は比人にとっても良き手本となる」と話した。

特攻隊戦没者慰霊顕彰会によると、神風特別攻撃隊は1944年10月、パンパンガ州とセブ、ダバオの3方面に配置された。同月21日にレイテ島方面などへ初出撃したが、米空母を捕捉できなかった。25日になって、ダバオを出撃した「菊水隊」がミンダナオ島北東部沖で米空母に体当たり攻撃を敢行し、続いてパンパンガ州を出撃した「敷島隊」がレイテ島東部沖で米空母攻撃に成功した。

観音像前で並んで焼香する特攻隊戦没者慰霊顕彰会の杉山泰理事長（手前）と郷土史家のディソンさん（奥）。左端はモラレス町長＝25日午前7時55分ごろ写す

日刊
まにら新聞
The Daily MANILA SHIMBUN
ASIAN INTERNATIONAL COMMUNITY INFORMATION, INC. (Printer-Distributor)
ASCI, Manila Shimbun Building, 1027 Tarona Street, Rizal Village, Makati City
Tel. 890-4546 / 890-4745
Fax. 890-3640
P70.00
Since 1992
発行 びすく社
東京都豊島区玉川2-9-15
© BYSCH 2011
http://www.manila-shimbun.com

「和平脅かす重大な懸念」

卜部駐比日本大使

ミンダナオ地方でイスラム急進派、モロ・イスラム解放戦線（MILF）による襲撃や国軍部隊との交戦が相次ぐ中、卜部敏直駐比日本大使は25日、声明を発表し、一連の事態を「和平プロセスを脅かす重大な懸念である」と表明した。

卜部大使は、まず犠牲者の遺族に追悼の意を表し、停戦を尊重し、和平実現に向けた交渉進展への努力をするよう比政府、MI

川南護国神社例祭

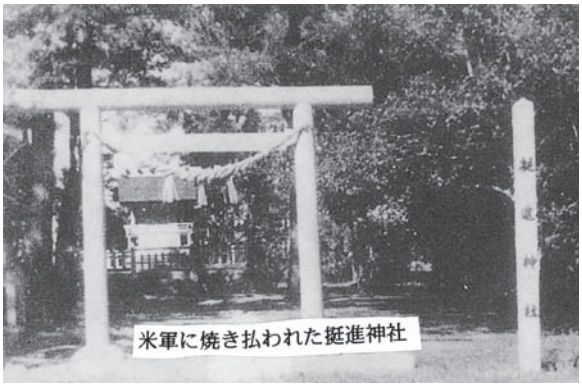
田中　賢一

首題の件を述べる前に、この社の建立について述べる必要がある。宮崎県には、宮崎市の八紘台の下に県の護国神社がある。この神社には県出身戦死者を祀ってあるのだが、川南護国神社には、村の戦死者六百余柱のほか、この村に根拠を置いた陸軍挺進部隊の一万有余の戦死者をもお祀りしてある。

このことについては、平成2年に発行した当会会報12号に掲載しておいたが、代も替わったので重ねて述べることにする。

村の豊原にあった陸軍挺進練習部の構内には、挺進神社があった。昭和18年に建立されたもので、厳密に言えば、それまでの戦死者をお祀りしてあることになるが、終戦時我々は、戦争中の全戦死者をお祀りしてあるものと心得ていた。終戦直後、戦災で焼け出された宮崎市内の宮崎師範男子部が、ここの空き兵舎に入ってきた。男子部の部長さんは、挺進神社は我々がお守りし、生徒の精神教育に活用しますと言うのでお任せした。

ところが、21年の春頃突然米軍が来て、挺進神社を焼き払ってしまった。


米軍に焼き払われた挺進神社

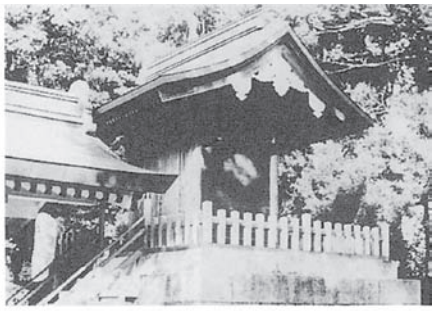
行方を失った英霊が、夜白い体操衣袴姿で師範学校の周りを走り回るとか、ラッパの音がするとか、新聞にも出て大騒ぎになった。村の遺族会長の石川富士之助翁が自宅の仏壇を改修し、挺進神社の焼け跡で拾った金属類をご神体としてお祀りしたら、幽霊騒ぎは収まった。

第一挺進団長中村大佐は、石河富士之助翁宅の近くの竹藪に小屋を建て、浜で塩炊きをして糊口をしのいでいた。同氏の考えは、トロントロン（地名で概ね村の中央）にあった霊堂を再建し、そこに祀ろうとするものだった。

再建された霊堂と村内住居の挺進部隊復員者

我々は知らなかったが、小さな霊堂があって、終戦直後の台風で倒壊したという。降下場跡の開拓民に空挺隊員が十数名おり、手分けして村の有力者に説いて回った。皆主旨には賛成するが進駐軍に咎められることを恐れ、行動してくれない。それでも中村大佐は屈することなく、財津村長を説き伏せ、昭和24年になって小さなお堂が出来、戦死者の霊を祀るに至った。

日本が独立を回復した後、そのお堂を本殿として遺族会が護国神社を建立した。現在の神社はその後建て替えたもので、当初のものではない。


その後建て替えられた現在の神社

さて毎年の例祭に私は、3年前までは必ず出席していたが、歩行困難になり、欠席せざるを得なくなった。空挺同志会の代表として習志野から出席した者の報告等を総合して、以下の記事をしたためる。

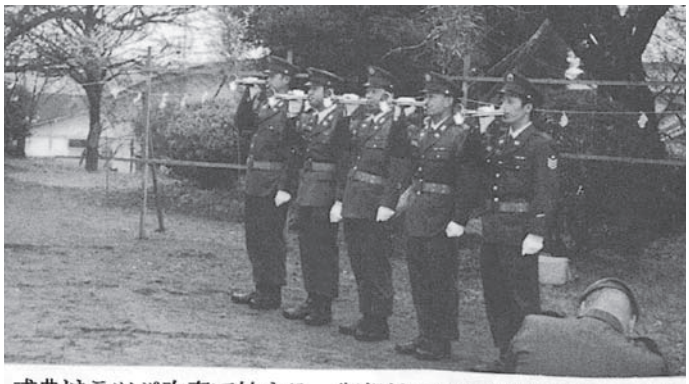
例年どおり11月23日、町長が祭主と

なって行われた。町民の参列者は約四百名だった。

恒例により空挺同志会宮崎支部が前夜祭を行った。同志会では本部のほか千葉、近畿、長崎の各支部から参加し、現職自衛官も16名参加した。また地元では、町長以下50名も加わり、総勢80名の盛会だった。

翌日は例年どおり、国旗掲揚からラッパ吹奏など都城の自衛隊が担当し、町役場吏員の進行で整々と行われた。自衛隊の慰霊の辞は、宮崎支部長が奏上した。自衛隊からは西部方面総監部、えびの部隊や新田原の航空自衛隊からも参列した。また、日生台で演習中の空挺団の隊員二百名も駆け付け、近来にない盛況になった。御祭神も御満足と思う。

当日生憎の小雨模様で参列者は四百名を超え、天幕に入りきれず、自衛隊の部隊参加の者は雨に濡れて立っていたという。



式典はラッパ吹奏で始まる　御祭神の御心に響いたであろう

世田谷山観音寺・特攻平和観音月例法要に参列して

会員　平野　勝也

平成23年10月18日、私は、九州に転居してから初めて特攻平和観音月例法要に参列した。

この日は、当顕彰会の初代会長であられた竹田恒徳元宮様のお孫様に当たる（明治天皇の玄孫でもあられる）竹田恒泰氏が初めて参拝に来られた。竹田氏は、沢山の著書を執筆しておられる。主に日本という国家や天皇陛下と皇室について書かれている。私は、世田谷山観音寺でお目に掛かる前に一度講演を聴いたことがある。新憲法制定議員同盟が主宰する「新しい憲法を制定する推進大会」に参加した時の講演会で、憲法の第一章第一条はは天皇陛下について記されている。日本という国家の根幹であることを示しているという話であった。確かにどの国も、一番大切な事柄を第一に挙げている。米国は米国議会制について、中国は人民民主主義独裁の社会主義国家を目指すと記載されている。大筋はそのような内容であったと思う。

この日の法要は、17～20名程の参列があった。特攻観音堂では、住職の読経に合わせ、全員で特攻平和観音経のほか、般若心経などを奉読する。その後、同寺境内にある代官屋敷に移動して直会を行う。直会では、初めて参拝された方が自己紹介をされたり、参拝している会員等からそれぞれの思いや慰霊活動の報告等で進められるが、今回は竹田氏からも話をお聞きすることができた。

竹田氏は第一に「戦争に関する皇族の思い」を述べられた。まず、皇族の方々は、戦争の最前線に行きたがっていたという事実、軍部は当然嫌がっていたが、高松宮殿下が戦前・戦中は海軍将校であったことなども例に挙げて話された。また、皇族は「特攻隊」を大切に思っていたことなども吐露された。特攻隊については現代人の、そのほとんどが、国家に騙された惨めな人達というイメージを持っているが、それは大きな誤解である。沢山の特攻隊員が亡くなられたことで、戦後、日本は解体されずに残ることができた。戦後の研究では、日本は怖いという諸外国の認識があるとも仰った。沢山の利があっても、一つ納得が行かないことがあると、全てを跳ね除ける民族であると。ドイツの東西分断から見ても、日本に対する戦後処理は特異であっ

た。敗戦を迎えるに当たり、総崩れのボロボロにならなかったのは、特攻隊が日本民族最後のプライドを見せた、だから日本は解体を免れたのであると付け加えられた。それから、神道と仏教が対立しているようなイメージを現代人が持っているのも、戦後のＧＨＱ占領政策の一部であり、本来の日本は神仏習合であって、現代とは違っていた。竹田氏自身も、最近の神主は仏教の知識が低く愕然としたという体験談を付け加えて話された。また、今年３月11日の東日本大震災で２万人を超える方々が犠牲になったこと、そしてその震災後の残された日本人の規律あるひたむきな姿勢が「日本人の精神性」を思い出させるきっかけになったとも仰った。そして、三島由紀夫の最期の言葉を挙げて、このままでは日本はただの経済大国になって、心がないということになってしまう。今こそ、日本人としての精神性を大いに発揮して良い日本を取り戻すべき時が来たと結ばれた。

直会後、竹田恒泰氏（左から３番目）を囲んで

こうして、いつもとは違った直会となった。竹田氏のような方が来てくださると、若手会員も勉強になると感じた。参加者から出た「また参拝に来て頂けますか?」との問いに、竹田氏は「是非、また来させて頂きたいと思います」と明るい笑顔でお答えになられた。

竹田氏には、今後ともお忙しいスケジュールの中、是非参拝して頂けたらと思う。私もできる限り、時間を作って参拝するようにしたい。

◇　◇　◇

【特攻平和観音月例法要案内】

日時　毎月18日　午後２時から
場所　世田谷山観音寺・特攻観音堂
住所　東京都世田谷区下馬
　　四－九－九
電話　〇三－三四一〇－八八一一
ホームページＵＲＬ：
http://www.setagayakannon.com/

一葉の記念写真

評議員　倉形　桃代

この写真は、昭和58年3月27日に、靖國神社で斎行された「特攻隊合同慰霊祭」後に行われた直会の席での一場面です。テーブルの真ん中には、満面の笑顔の竹田恒徳初代会長が、向かって右隣には歌手の渡辺はま子さん、左隣には俳優の鶴田浩二さんが座っていらっしゃいます。

当時、私はまだ二十歳を過ぎたばかりで結婚前でしたが、親しく交流のあった御遺族の辻繁雄様と婚約者であった夫と一緒に参列させて頂きました。直会では、竹田会長の御挨拶のほか、渡辺はま子さんの歌唱、（「蘇州夜曲」だったと思います）鶴田浩二さんの御挨拶もありました。

同行した辻繁雄様は、陸軍海上挺進戦隊第十二戦隊所属で、昭和20年1月9日、フィリピン・リンガエン沖の水上特攻で戦死された辻治雄伍長（石川県出身・特幹1期）の御尊父様です。世田谷山観音寺・特攻平和観音の月例参拝でお顔見知りとなり、お亡くなりになるまで本当の孫のように可愛がって頂きました。息子さんのことは「寅年だったから、頑固者だった」と、ポツリと淋しそうに仰ったことを記憶していますが、それ以外は余り語られなかったように思います。辻様から頂いたこの写真を見ながら、その悲しみの深さを改めて思い起こしたので、ここに鎮魂の気持ちと共に、当時の思い出の一コマとして記しました。

初代会長竹田恒徳元宮様を囲んで

回天特攻戦没者慰霊祭

評議員　石井　千春

人間魚雷「回天」の特攻基地は、昭和19年9月1日、徳山沖の大津島に開隊した。訓練開始早々の同月6日、回天創始者の黒木博司大尉が、樋口孝大尉と共に殉職。座礁した回天の中で、二人は事故の経緯を書き記し、回天戦成功の悲願を後に続く者に託した。

回天特攻の初陣、菊水隊が大津島から出撃したのは11月8日、隊長の仁科関夫中尉は、黒木大尉と共に回天特攻戦の草案作成、上層部への具申、兵器の実験、基地開隊に心血を注ぎ、黒木大尉殉職の後は隊員の教育に勤めた。

昭和20年8月の敗戦まで、大津島から出撃した回天特攻隊は、基地回天隊を含め10隊に及ぶ。大津島は、回天特攻隊のメッカである。

回天の最初の慰霊祭は、終戦から10年後、元隊員が、11月8日、菊水隊出撃の日に大津島に集まって行われた。10年前の秋、終戦処理に当たっていた隊員たちは、兵舎前広場に回天碑を建て、10年後の再会を約して復員したのだった。

10年経ったその場所に石碑はなく、台座だけが残っていた。その台座に元隊員たちは供え物を供え、慰霊供養を行った。それから毎年この日に集まり、慰霊祭を催したのである。

4年目の33年に、碑石が土に埋まっているのが見付かった。地元有志の手で掘り出されたが、石は割られていた。隊員たちは防長救国同士会と話し合い、砕かれた石碑を埋没神霊とし、その上に新しい石碑を再建した。回天碑再建世話人会を作り、募金を募ったのだ。回天碑除幕式並びに慰霊祭は、昭和36年3月26日に執り行われた。

わだつみは青く澄みわたり
その若き命惜しまず
回天の道をさきがけ
ふたたびは帰り来ぬ君
鎮まりて今日も昨日も

勝敗は兵の常なり
問うなかれたとえ散るとも
回天の夢を求めて
海原を君は征きしか
はるけくも北に南に

「回天追悼の歌」を合唱する男性コーラスが流れる。平成23年11月23日11時10分より「回天烈士並びに回天搭載戦没潜水艦乗組員追悼式」が今年も執り行われた。回天顕彰会主催のこの追悼式には、山口県、周南市ほか各種自治体、国会議員、海陸空各自衛隊の代表、地元諸団体、会社、有志、旧軍関係者など多数参列する。年々少なくなる御遺族の中に、黒木少佐の妹・丹羽教子様のお姿が今年も見えた。回天会会長の小灘利春氏、事務局長の河崎春美氏のお姿がないのがさみしく、残念であった。

海兵72期の小灘氏は、昭和19年9月6日に大津島基地に着任した。遭難した黒木・樋口両大尉の回天を捜索して夜の海を内火艇で走った。翌朝、毛布の掛かった担架が、丘の本部に至る急な石段を運ばれて行くのを見た。毛布がめくれ、白い素足があらわになった。殉職した黒木大尉だった。救国の使命に燃えていた小灘少尉は、新兵器の危険と困難を目の当たりにして覚悟を胸に刻んだ。昭和20年4月、第二回天隊として八丈島に出撃し、終戦を迎えた。

甲種予科練13期生の河崎氏は、倉橋島のQ基地で訓練を受けた後、昭和19年11月に光基地に着任、20年3月、光突撃隊として高知県須崎に出撃し、終戦を迎えた。

生き残った隊員として回天の慰霊顕彰に尽力されたお二人の功績は計り知れない。

小灘氏は平成18年9月23日早朝逝去された。この日は、世田谷山観音寺における年次法要の日で、私は来賓受付の手伝いをして山門の前にいた。式が始まって間もなく、大きな揚羽蝶がひらりと飛んで来て山門を抜けて行った。その夜、河崎氏から電話で、小灘氏の訃報を聞いた。あの蝶は・・・。魂が蝶になって、山門を通り、小灘さんは慰霊祭に参列されたのだ・・・。

河崎氏は回天の生き字引で、毎月の会合だけでなく、下呂、長野、須崎など各地の慰霊祭や基地跡にご一緒し、沢山の貴重なお話を伺った。2年前からご自宅で療養中である。

追悼式は、国歌斉唱、黙祷、回天顕彰会会長の式辞、周南市長、山口県知事、海上自衛隊呉地方総監の各追悼の言葉、献花と進行していった。空自防府基地、海自小月教育航空群、海自岩国基地からの航空機による編隊慰霊飛行が秋晴れの空を飾った。

小灘氏、河崎氏ほか回天の元隊員の方々に、私は沢山のことを教えていただいた。献身の尊さ、苦難に打ち勝つ心、友情、努力・・・。回天会の皆様との数々の思い出が胸をよぎり、感謝の気持ちで一杯になった。

式典の終盤、大徳山太鼓の「回天」が奉演された。力強い太鼓の音が腹に響いた。回天碑の向こうには青い海が見える。国に殉じた戦士たちの魂が今も私たちを見守っている。慰霊顕彰は

私たち次世代の務めだ。感謝と尊敬の念を新たにした。

最後に、特攻隊戦没者慰霊顕彰会代表代理として回天追悼式に参列させていただき、この場をお借りして、お礼を申し上げます。

回天碑前慰霊祭祭場

大津島回天基地跡

世田谷山観音寺参拝

隊友会世田谷支部
支部長　岩崎　修治

平成23年12月17日、凍てつく空気の中、隊友会世田谷支部会員12名が世田谷山観音寺に参拝、文化財の研修を実施しました。年齢構成も40代から80代とまちまちでしたが、特攻隊慰霊顕彰の聖地が地元世田谷区下馬にあり、心ある有志の皆様が、その慰霊顕彰事業に携わっていることを、参加者全員が認識できたものと思っております。

隊友会は、今年平成23年4月から公益社団法人としての新たなスタートを切り、定款に新たな事業として「殉職自衛隊員及び戦没者等の慰霊・顕彰」が挙げられました。また、新年度開始直前に発生した未曾有の東日本大震災・原子力災害により「地方自治体の国民保護・防災施策に対する協力」「自衛隊の諸業務・活動に対する協力支援」も今までとは重みの違うものになりました。世田谷隊友会も東日本大震災に伴う支援業務を実施又は準備しつつ、上部規則の改正に伴う支部規約の改正・役員人事の大幅変更・3年毎の名簿改正等を行いましたが、新たな事業については7月に入って検討を始める状況で、総会で決定した事業計画においても具体化出来ない状態でした。

7月役員会で、慰霊・顕彰事業として靖國神社と世田谷山観音寺参拝、防災施策協力事業として、救急救命講習実施を決定しましたが、世田谷山観音寺参拝には、会勢の復活・魅力化の事業としての郷土世田谷ウオーキングの意味も含めておりました。私は個人的に毎月1回参拝しておりましたが、簡単なお参りでしたので、先月顕彰会の皆様はじめ有志の方々の月例参拝に参加させていただき、目から鱗が落ち、今回の私共の参拝も法要に準ずる形にいたしました。皆様の法要に参加させていただく案も考えましたが、私共の参拝・研修の態度も固まらず、独自で実施させていただきました。世田谷隊友会は、隊友会の孫組織でありますが、今後とも御厚誼のほどよろしくお願いいたします。

◇　◇　◇

注　この日の参拝にご一緒させていただき、拙い話ではありましたが、特攻慰霊顕彰会の活動について紹介をさせていただきました。御住職・太田賢照様の読経・特攻観音堂・境内の文化財等の説明も頂き、大変有意義なお参りとなりました。隊友会の皆様は、境内の慰霊碑にも花と線香を手向け、祖国の礎となられた英霊を偲んでおられました。自衛隊のOBの方々と一緒に、戦時中軍の病院で看護婦として働いておられた女性もお二方おみえになりました。自衛隊の方々は、英霊の任務・志を直に受け継いだ方々です。後輩、そして看護婦として現場で傷病兵の看護に当たられた方々の参拝で、在天の大先輩方も、さぞ喜ばれたことと思います。私自身も、大変清々しい気持ちでお参りできました。

（倉形桃代記）

靖國の御祭神に奉る歌と御祭神の遺詠

田中　賢一

○九段坂昇りてゆけば御祭神
心にかなうこの桜道
井辰勉海軍少尉の遺詠
靖國の庭に競へる若桜
我も遅れじ散りて開かん

○靖國の庭に咲きたる桜花
心に叶うかあの散り際が
義烈空挺隊関三郎軍曹の遺詠
よしや身は千々に散るとも来る春に
また咲き出でん靖國の宮

○散る桜おのがさだめと重なりて
特攻隊の遺詠にあまた
長沢徳治陸軍少尉の遺詠
来る年も咲いて匂へよ桜花
われなきあとも大和島根に
佐藤光男陸軍少尉の遺詠
咲きしより散らん桜花の心なれ
散るべき時ぞ今この時
岩佐直治海軍中尉の遺詠
桜花散るべき時に散りてこそ
大和の花と賞らるるらん

○ソ連軍樺太真岡に侵入し
電話乙女の自決悲しき
昭和43年稚内公園内にある慰霊碑に行幸啓された天皇皇后両陛下は、次の御歌をお詠みになられた。
昭和天皇御製
樺太にいのちをすてしたをやめの
心おもへばむねせまりくる
香淳皇后御歌
樺太に露ときえたるをとめらの
みたまやすかれとただ祈りぬる

○沖縄に莞爾と発てり義烈の士
命と換えし祖国の山河
義烈空挺隊は、昭和20年5月24日、熊本の健軍飛行場を発って沖縄に向かった。隊員の残した歌は沢山あるが、その中の数首。
隊長奥山道郎大尉
すめらぎの御楯となりて死なむ身の
心は常にたのしかりけり
渡部利夫大尉
うれしさを何にたとえん武夫の
御垣の守りと散る機に会いて
棟方哲三少尉
君が代はちよよろずよといく春も
匂ひ忘るな若桜花
辻岡創少尉
骨は砕け肉は散るとも魂魄は
すめらみくにを永遠に守らん
渡辺裕輔少尉
かずならぬみ山に咲きし若桜
君が御為に散るぞうれしき
今村美好曹長
奥山に名もなき花と咲きたれど
散りてこの世に香りとどめん
尾身勢二曹長
武夫の散りてうれしきこよいかな
神風吹かん大和島根に
松実留四郎曹長
しきしまの大和男子ぞわれもまた
大君のため散るぞうれしき

○花負いて空射ち征くと書き残す
壁の一首にその決意知る
レイテ空挺作戦で、降下部隊が立ち去った後、宿舎の壁に書き残してあった歌。
花負いて空射ち征かん雲染めん
屍悔いなく吾ら散るなり

○特攻の士母と別れしこの歌は
幾度詠むも胸迫りくる
第55振武隊鷲尾克巳陸軍少尉
告げもせで帰る戎衣の我が肩に
両手をかけて笑ます母かも

○靖國の神とならむと詠いたる
特攻の神ぬさたてまつる
特攻隊員の遺詠には靖國の神となることを歌ったものが沢山ある。
第20振武隊長谷川真大尉
春まだき九段の花咲き散りて
勝ちみ戦の基ひらかん
第43振武隊浅川又之少尉
花と散り九段に還るを夢に見つ
敵艦屠らん我は征くなり
第74振武隊大畠寛伍長
さくらさくら若桜今日は散りても
明日は九段の花と咲く
神雷第2建武隊篠崎実一飛曹
桜花君安かれと祈りつつ
心待ちたる今日の門出を
神雷第2建武隊杉本徳義一飛曹
身は砕け屍は桜花と散ろうとも
霊や皇国の空を守らん

○やまと歌如何に推敲重ねるも
夫を送りし婦女に及ばず
敵がレイテに上陸した4日後の昭和19年10月24日、挺進第三聯隊に動員が下令され、翌未明に乗船地に向かうことになり、営外者は数時間帰宅を許された。天川准尉の妻真理子の歌
さらばとて夫の握れるたくましき
み手のぬくもり今も残れり
天川准尉の戦死の状況は判らない。

○靖國の宮居に響く柏手は
御霊を呼ぶか灯またたきぬ
柏手を打って神殿の奥に目を凝らすと何か霊感を覚える。

和歌で綴る我が部隊史

田中　賢一

ここに陸軍挺進部隊活躍の姿を和歌にしたたむ　詞拙くして意達する能わざるも　決戦場に散り　或いは志半ばにして職に殉ぜし友の霊に　聊かなりとも応うるところあらん乎

富む春秋国に捧げし友垣に
　済まぬ思いで卒寿疾く過ぐ

田中賢一

陸軍挺進部隊一代記

独軍の電撃戦に目を見張り
　何劣るべき我にあらんか
浜松の飛行学校練習部
　創設せしは十五年末
開拓の意気高らかに三方原
　大空に咲く花落下傘
三方原手狭なりとて白城子
　大平原は果てなく続く
はじめての殉職者出ず落下傘
　真白き傘布血潮にて染む
初宿（しゃけ）軍曹は補助傘と主傘の傘頂部を結ぶ紐が足に絡まり不開傘となった。

冬思い宮崎の地に移転して

練習部とて独立せり
　それまでは飛行学校に付属していたが、航空総監隷下の陸軍挺進練習部となり、落下傘部隊と飛行部隊を持つことになった。
天孫の降臨給ひし日向の地
　連日降下す唐瀬の原
夏草も繁らざるほど武を練りて
　精鋭無比の四個聯隊

緒戦はスマトラパレンバン

喪家の狗よオランダ兵
　我が精兵に敵するはなし

作戦の報告として宇都宮

五百の花咲かせたれども
唯ひとつ君が馬前に流れ散る
　侍従を通じ弔問賜う
松浦軍曹は不完全開傘で予備傘を引いたが間に合わず殉職した。
天皇陛下の御言葉は浄書して額に納め、一聯隊の聯隊長室に掲げられ、二聯隊の南方軍司令官の感状に対抗していた。
戦局は頽勢となるその頃に

滑空部隊新設せらる

世界的空挺部隊の趨勢は
　滑空部隊に移りつつあり
その間に**特筆するは小丸川**
　憾みは深し八名死す
挺進第四聯隊榊原中尉の計画指導した演習で、小丸川を徒渉する場面があり、前日山間部に降った雨で増水していたのに強行したため、全員流され八名が殉職してしまった。榊原はその場で自決しようとしたが、聯隊長に諭され思い止まり、後にレイテ作戦で特攻を志願し戦死した。
榊原死すべき場所は戦場と
　君が苦衷ぞ知る人ぞ知る
昭和19年6月から第二挺進団に動員が下令されるまで挺進練習部下士官候補者隊長だった私の指揮下にあった。川南秋の祭りのその中に

動員下る二挺進団

かねてより覚悟のことぞ疾きことは
　風の如くに屯営を発つ

高千穂の名負う精鋭レイテの地

傾く大廈如何に支えん
残る者ルソンの野にて戦うも
　衆寡敵せずあまた斃れぬ
翼なき**滑空機も馳せつけど**
　クラーク地区に屍さらしぬ
遺恨なり空母雲竜乗りし人
　敵とまみえず水づくかばね
滑空歩兵第一聯隊ほかこの時の出動部隊の半数近くが雲竜に乗ったが、台湾沖で敵潜に沈められ、日没時だったので救助された者は僅かだった。
空挺の掉尾を飾る**特攻隊**

義烈は征きぬあとを託して
漠たりや六十余年は夢のうち
　ああ青雲に友の声あり
みそひとの文字にとどめて残しおき
永遠に伝えん亡き友思い

過去を掘り起こすこと

エフエムさがみ
制作担当　川畑　良介

私は宮崎県日南市油津という漁港で生まれた。高校卒業まで過ごしたこの街は、退屈な街だった。「この港の近くに人間魚雷の人達がいて」過日ふと、今は亡き祖父の昔話を思い出した。何度となく聞いたこの話は「皆で魚を獲っては差し入れに行ったもんだ」でいつも終わった。自宅から車で30分程行くと、細島という太平洋を遥かに臨む場所に「回天隊訓練地」の石碑がある。大戦後期、沖縄をめぐる攻防で、南九州は「特攻」の最前線となった。
祖父の昔話のように、特攻隊の話や足跡が各地にひっそりと残っている。私の小学校の修学旅行先も、鹿児島県の知覧や鹿屋というお決まりのコースだった。自分の周りには「特攻」という言葉が空気のように存在していた。高校卒業後、アメリカに留学した。その間「カミカゼとは？」と聞かれることが度々あった。小さい頃から聞き慣れている言葉ではあったが「手段としての特攻」は、日本近代の歴史を語る

上での重要なキーワードの一つであり、日本の民族性（多少異質な状態であったにせよ）を表す言葉であると言っても良いのに、私は表面的なことしか知らなかった。

帰国後、放送の仕事に就く事になり「特攻」という言葉の深いところにあるものを知りたくて、何度か取材をしたことがある。知覧、鹿屋は勿論、戦争末期の「白菊」（海軍の機上練習機／航法・通信・射撃・偵察等、操縦以外の任務の訓練用）による特攻、海軍神雷部隊の桜花、相模原にあった陸軍中津飛行場から出撃した神鷲隊、そして義烈空挺隊・・。中でも神雷部隊の一式陸攻の機長だった方の「ボタン一つで人を殺すんだ」という言葉が強く印象に残っている。特攻待機で終戦を迎えられた方や、戦死された方の御遺族、出撃を見送った方等、当時を知る方々との様々な出会いがあった。宮崎県加世田基地（現・宮崎空港）で、当時特攻隊のお世話をされていた女学生の方々と、正月にお会いしていた時期もあった。当時の事を語りたくない方もいらっしゃる。数々の出会いの中で、それぞれの「特攻」の捉え方があった。取材の中で共通して語られたのは「伝えて欲しい」という言葉であった。終戦から66年という年月が過ぎた今、若い世代に「特攻」について話を聞いて伝えることはできても、理解させることは、なかなか難しいことのように感じる。太平洋戦争が連綿と繋がった日本の歴史の沸点であり、その泡のように命を翻弄された若者達がいた。そしてそれが収まった後、同じ日本人ではないように錯覚する程、見識の異なった日本人が生まれた。「特攻」を史実ではなく、昔話の美談のように語られることがある。しかし、取材の中で聞いて来た「伝えて欲しい」という言葉の意味は「特攻」を「事実」として捉え、風化させることなく後世に残していって欲しいということではないかと、私は思う。そういう意味でも、メディアの役割は大きい。戦史の資料には限りがある。そこから飾られた事柄を省き、後世に残す。それは途方もない作業であろう。「特攻」の歴史がまだ手の届く歴史、当時を知る方々がご存命であるという点で、「今」事実を記録し留め置くことが可能な歴史なのである。太平洋戦争中、報道は形骸化し、歪曲した事実を伝えた。これからは、有りのままの声・出来事を伝えなくてはならない。声なき声をあげながら、歴史という大海を漂っている66年前の若者達の声に耳をすませて。

◇　◇　◇

注　「エフエムさがみ」について

神奈川県相模原市にあるコミュニティ放送局。この度『それいけ！！さがみ月光団！！』という番組内の歴史特集のコーナーで、地元愛川町にあった陸軍中津飛行場と、そこから出撃した特攻隊について紹介したいという主旨で当会の事務局に依頼があり、取材協力をした。昭和20年8月13日、下田沖の敵艦船に対し、中津飛行場から第三九八神鷲隊の本田続曹長機・小松重英伍長機・第一練成飛行隊の後藤秀男軍曹機、計3機が特攻出撃、散華された。

川畑氏によると、放送後の地元住民の方々の感想は、特に愛川町で聴いていた方々からの反応が大きく「特攻された方が最期に見た愛川の風景を守っていきたい」「愛川町から特攻隊が出ていたことを知らなかった」等の感想があり、企画された局として、大変有意義な取材になったと、御礼とご報告を頂いた。

（倉形桃代記）

少年特攻兵士の遺書

栃木県・元陸軍少年飛行兵九期生　会員　水谷　郷

戦後の調べで陸軍特攻出撃者は、総数千百九十名という記録がある。その内訳を調べてみると、十九～二十歳の少年飛行兵出身者が四百七十五名と最も多く、次いで大学・高専から学業を投げ打って軍隊に入り速成将校となった特別操縦見習士官（特操）が三百二十名で、この両者で全体の六十七％をしめている。

職業軍人として陸軍の中枢であった士官学校出身者は百三十五名と意外に少ない。その他の二百六十名は、逓信省乗員養成所出身の予備役下士官と一般操縦縦下士官である。

士官学校出身者が少ないのは、指揮官として特攻隊長に充当するためで組織が三角形である以上当然であったろう。

戦後、陸軍特攻隊員の三分の一以上を占める少年飛行兵出身者のことについての記録は少なく、案外世間に知られていない。海軍予科練についての記事は見受けても陸軍少年飛行兵そのものについてはあまり見受けられない。

私は、昭和十四年の十月、東京陸軍航空学校に入校した九期であるが陸軍航空の中核を占めた少年飛行兵について忘れ去られることを残念に思い、少し詳しく述べさせて頂き、その後、栃木県から出撃した二名の隊員の遺書を紹介させて頂くことにする。

少年飛行兵の制度について

昭和の初期、科学技術の結集である航空機の操縦・整備技術に関しては、まだ頭脳の柔らかい少年のころから学ばせる必要があるということで、海軍が昭和五年、海軍飛行予科練習生、いわゆる「予科練」の募集を始め、陸軍は四年遅れて昭和九年少年航空兵の募集が始まり、二月に第一期生、操縦生徒七十名、技術生徒百名が所沢陸軍航空学校に入校した。

一期操縦生徒七十名の募集に応募者は一万三千名の約百八十六倍の高競争率であったそうで、戦時下の少年たちの憧れであった。

昭和十三年、制度が改正され、それまで操縦生徒・技術生徒別々に募集していたが、その区別をなくして同時に募集し、合格者を春秋の二期に分けて東京陸軍航空学校に収容して一年間、軍人としての基礎教育を実施することにした。この年四月入校の東航校一期生は、少年飛行兵六期生に相当する。一年後、適性検査をして操縦・整備・通信に分けて上級学校に進学、二年間それぞれの専門教育を施してから飛行部隊に配属することにした。

基礎教育一年間を共に過ごしたことは、部隊配属になっても生徒の頃、同じ釜の飯を食ったということで、同期生や先輩・後輩の絆は強固で、はなはだ好都合であった。

上級校の専門技術修習過程は、二年間の計画通りに修習したのは六期生だけで、戦局の進展とともに七、八期生は二か月、九期生からは四か月の短縮授業となる。

昭和十七年四月入校の十四期生以降は、年齢の高いもの（16歳）を基礎教育の期間を省略する乙種という制度を設け甲、乙に区分され、また募集人員も十四期甲種千五百、乙種千五百、十五期甲種二千五百、乙種八千三百と急速に増大した。

昭和十八年三月、東京陸軍航空学校は東京陸軍少年飛行兵学校と改称、十八年に大津、大分に分校が開設され、呼称もそれぞれ地名をかぶせて大津陸軍少年飛行兵学校などと呼称するように変わった。戦局の急速進展に伴い航空技術員である航空隊下士官の補充が急がれたのである。

昭和九年入校の一期生から昭和二〇年八月入校の二十期生までの総数四万五千二百、実戦参加の十六期生までが二万八千三百で戦死者総数四千五百二十九名、約十六％であるが、募集人員の少なかった十二期生までの各期戦死率は五十～六十％でそれぞれ約半数が戦死している。

基本校の教育内容

教育内容は、最初の東航校基礎教育では毎週一回中隊長の精神訓話があり、軍人としての心構え、主として明治十五年一月四日発布された「軍人勅諭」の講話が繰り返しあって、お前らは大義に殉ぜねばならぬ、つまり天皇陛下のため国のために一身を捧げねばならぬ、というような観念を叩き込まれる。

そのほか、午前中は国語・数学・歴史、英語・図学などの普通学、飛行機工学、発動機工学の初歩、地形学や作戦要務令など典・範・令という各種軍隊の規則などの軍事学があり、覚えなくてはならないことは多い。

午後は、術科として、軍人として全くの基礎である不動の姿勢から歩き方、敬礼の仕方、小部隊の指揮運用、小銃などの武器の扱い方、戦闘訓練、銃剣術、両手軍刀術の練磨、その他にも長距離行軍・野外の露営、などの烈

しい訓練があった。それは軍隊の学校だから当然としても、日常起居の内務生活で今では想像もつかない私的制裁という暴力行為が日常化していた。

内務班の教育

一個中隊は、五区隊、十内務班、一個班二十名編成で、内務班には軍曹クラスの内務班長が居る。

入校当初、中隊長を父と思い、班長を母と思え、と言われる。

班長は、一般社会と異なる軍隊内務生活の細部を、何も知らずに入校してくる十五、六歳の少年に事細かに教え込まねばならないから大変である。

軍隊生活は型にはまった兵士に仕上げるため、明治健軍以来、驚くほど細部にわたって規定されている。

例えば、入校当初、憧れの少年航空兵制服に着替えるとき、着用してきた中学校や青年学校などの衣服を脱ぎ捨て、まず越中褌を締め、その上に襦袢・袴下、シャツ、股引のことだが、それを着用するが「○○は左に入れるを可とす」との規定があるということを教えられ、そんなことまで決っているのか、とまず驚かされる。

針と糸の使い方で、襦袢にボタンをかがるには四ッ穴を平行にかがる、×は不可。靴下の修理は、石鹸箱をもぐりこませて繕う。戦後、丈夫になったのは女性と靴下だと言われたが、昔の軍足と言われた靴下は、すぐに穴が開く代物で、しょっちゅう補修せねばならなかった。

襟布は襟から三ミリ出ていること、襟章の位置、胸の鷲のマークの位置は何ミリ、編み上げの軍靴の靴紐は外側からが上であること。訓練で毎日汚れる靴の手入れ要領は、舎後に出て、竹べらで靴底の泥を落とし、刷毛で被った土を落とし保革油を塗って仕上げる。

毛布を包む包布はどのようにして包むか。洗面所での洗濯の仕方、下着などは平らな板の上でごしごしやればよいが、冬のラシャ製の軍服上着を洗うのは水につけてから裏生地に石鹸を塗り刷毛で洗う。襟布は大きな三角布だが洗濯後、濡れたまま五センチ幅に畳んで窓ガラスに張り付けて乾かす。糊を着けたようにぴしっと乾く、などなど。

整理整頓で、整頓棚の夏・冬衣服、襦袢・袴下は定規で測ったように折り目正しく畳んで積み重ねねばならない。曲がっていれば銃剣術用木銃でひっくり返されることになる。

食器に飯を盛るのはふんわりと盛り付ける。班長当番で湯呑にこびりついた茶渋は砂で洗って取れと言われる。

三八式歩兵銃、天皇陛下から下賜された軍人の魂である。少し手入れを怠るとすぐに錆びが出る。洗い矢・洗管の先に油を浸したぼろを巻き付け銃口から差し込んでこする、細かいぼろの糸くずが、微かにでも残っていればアウト。時々、通りかかった下士官が銃架の銃を適当にヒョイと取り上げ、槓桿を開いて逆さに振り上げ銃口から覗いて検査する。銃の手入れの後、撃鉄（引き金）は引いておかねばならない。銃架に置いてある銃の槓桿をさーっと撫でていくと、撃鉄をかけたままにしてある銃は、がちゃりと落ちる。「この銃は誰だ！」ということになる。

そのほか細かい軍装の要領、軍隊用語のさまざま、「僕、私」は「自分」。語尾は「であります」。「と思います」などの曖昧語はダメ。トイレは「厠」アルミの食器は「メンコ」、バンドは「帯革」、スリッパは上靴などなど。

上官の部屋に入るときはノックして入り、後ろ向きでドアを閉め、回れ右して十五度の敬礼「○○生徒、班長殿に用事があってまいりました」など大声で言う。帰るとき、「○○生徒、帰ります」、回れ右。

一度、ノックして入ったら「貴様、どのようにしてノックしたか？」「はい、こうしてやりました」拳骨で叩いた形をする。「ダメだ、ノックは拳骨裏側の薬指第二関節でコツ、コツとやるのだ。やりなおし！」と教えられる。

私的制裁

入校当初、班長は細かく指導して以後は規定を守っているかどうか、厳しく監視する。教えられた規則に反することをやると「足を拡げ、歯を食いしばれ！」次にサザエのような拳骨が飛んでくる。

例えば、毎日の訓練で汚れた軍靴の手入れは、舎後に持って行ってやるのだが、忙しかったり、面倒だったりして内務班の寝台の隅でこっそり隠れてちょこちょこやっていると、大概班長に見つかる。

「貴様、そこで何をやっているか！」

「はい、編上靴の手入れをやっております」

「内務班で編上靴の手入れをしていいと誰から習った！」

「はい、習っておりません」

「習って居ないことを何故やるか。出てこい、足を開け、歯を食いしばれ！」

次に目もくらむような拳骨が頬に飛んでくる。

拳骨は殴るほうも痛い、時には上靴（底が革のスリッパ）でも殴る。これ

でやられると確かに目から火花が出る。一度殴られた後、頬にニキビのようなブツブツが出来た。

特異な経験を紹介する。

高崎商業から来た奴が同班に居た。羽織袴で入校してきたのは彼一人であった。背の高さは中程であったが、きりっとした精悍な面構えで頭も良く、気迫もあり、何事も群を抜き忽ち我が班のリーダーとなった。しかし彼は、班長の前ではおべっかを使い、上司の目が届かない日曜日など、大胆にもこっそり天井裏に上がって隠し持っているタバコを吸ったりするなど表裏のある人間だった。初めは、班長も可愛がっていたが、やがて彼の二重人格を見抜き、ある夜、彼を徹底的に殴った。

「貴様の根性を叩きなおしてやる。足を拡げ、歯を食いしばれ」怒声とともに三十も四十も殴る。「しっかり立っていろ！」の怒声、倒れそうになるのを必死で我慢している。青痣が出来て顔が次第に腫れて来る。その夜は、隣の寝台戦友が洗面器の水にひたしたタオルで冷やしてやる。翌朝五時半の日朝点呼で飛び起きて整列の時に見たら、お岩さんもかくやとばかり、目もふさがるほど顔面は腫れ上がっていた。彼は、重爆操縦のコースに進み、卒業して戦隊勤務中、移動の為九七式重爆に同乗した機が離陸直後立川郊外に不時着発火して事故死した。何かやりそうな男であったが惜しいことであった。

日夕点呼時、回ってきた週番士官が廊下の痰壷の中に痰があるのを発見した。「班長、注意しとけ」と班長に言って去った。点呼後、烈火のごとく激怒した班長は、「本日の内務当番一歩前！」七名がぱっと出る。「貴様らこれを飲め！」。さすがにそれは無茶と思ったか、次に痰壷の陶器製の蓋を持って頭から力任せに殴ってゆく。点呼終わって舎後の洗面所で頭を冷やす当番生徒たち。皆、涙目に大きなたんこぶが出来、頭が切れて血を流している者も居る。後にこの痰壷事件の半数は戦死した。

隣の班員で一番背が高く、体格もがっしり、積極的に事に当たる覇気のある優秀な九州大牟田出身の生徒が居た。班長も目をつけていたようであったが、この生徒が他班の班長に殴られて鼓膜を破られた。どのような経緯であったかは不明であるが彼は、以後、ぐれたようであった。戦闘機操縦間違いなし、と思われていた彼は、上級学校は整備で、しかも金属専攻であった。所沢は機関が二個中隊、電機・金属で一個中隊編成であった。機関の重・軽爆専攻は、機上機関として空中勤務となるが、金属専攻では飛行場大隊か航空廠あたりに配属となる。大空を駆け巡る夢を抱いて入校してきた彼の希望は潰えた。卒業以後の彼の消息は不明である。優秀な人間の一生をつまらぬ暴力行為でへし折った下士官は何ら責任を問われることもない。

日常、緊張連続の内務生活、非常呼集・火災呼集で起こされる。時に班長当番、不寝番、勤務生徒などの上番が回ってくる。ボヤボヤしていると人後に落ちる。横着を決め込むと必ず報いが来る。十五～六歳、やっと母親恋しさから抜け出したばかりの少年たちが良くこれらのしごきに耐えた。

罰則としては、殴る以外に「早駆け」「前支え」などの体罰は日常的であった。

我々が入校した昭和十四年は、五月から九月にかけてノモンハン事変が勃発し地上戦は惨憺たる敗北に終わった事変であった。

このノモンハンに参加した下士官で航空兵科に転科し、東航校の助教として配置されるものがあった。生死の境を切り抜けてきたからであろうが彼らは、いわゆる「野戦帰り」と称され、眼光も鋭く、粗暴で容赦なく生徒に暴行を加えた。彼らの粗暴ぶりは他の下士官にも伝わり暴力行為は伝播していた。五区隊の班長二名だけは個室に入っていたが集合下士官室に収容されていた他班の班長達は毎夜、誰かが生徒に怒声と共に制裁を加え、それが全般の風潮のようになっていた。

一度用事があって、そこを訪れた時、ある下士官は、悲鳴のような怒声を張り上げながら、洗面器の赤チンを溶かした水に手を浸しては、両手を交互に使って両頬を殴る彼独特の方法で、いつまでも一人の生徒を殴りつけていた。ほかの下士官たちは知らぬ顔であった。

幼年学校・士官学校では私的制裁があったという話は聞いたことがない。班長の下士官たちは生徒が、卒業後は彼等より上級の将校に任官するから、遠慮もあったであろう。

同じ陸軍生徒でも、少年飛行兵は下士官養成の学校であるから、彼らはあくまでも先輩であるし、後輩として下士官の道を歩む少飛の生徒には遠慮手加減もなかったようであった。

昭和十三年四月入校の東航校一期、少飛六期生は、新制度で開校当初であったからか、彼らは大事にされたようで暴力を受けた記憶はないという話であった。翌昭和十四年後期、十月入

校（九期）の我々はノモンハンの直後で時期的に運が悪かったのかもしれぬ。

もっとも、楽しい記憶もある。夏季の沼津我入道海岸で1週間の遊泳演習、秋季の体育大会、夏、冬の休暇などの他、通常では日曜日夕食後の軍歌演習、校門の遠くに夕映えの小さな富士山、広い校庭に円を描いて歩きながら暮れゆく大空に向かって声を限りに歌う。

♪皇御国（すめらみくに）の大空に　妖雲払う　御楯われ
東和の平和　永久（とこしえ）に　正義を守る
陸軍の
威容を仰げ　空の陣

俺たちは、陸軍航空の中核となるのだ、の高揚した気分が胸奥から湧いてくるのを感じていた。

上級校

一年後、適正検査で操縦・整備・通信に分かれて上級学校に進学。私は所沢陸軍航空整備学校に進学した。

上級学校では、夫々の専門教育があるが、所沢での内務生活は、基本校とあまり変わらず、ビンタ・早駆けは日常のことであった。

所沢には当時、気球を収容する巨大な気球庫があった。戦後もあまり大きいので取り壊されずしばらくはそのままであった。我々九期の校舎は台下にあったがこの気球庫は週番下士官にとっては格好の早駆け目標で、何かというと「気球庫一周！」の号令がかかり、遅い奴はもう一周となるから、必死で走る。ある曹長は、週番に上番したとき「十周！」の号令を下した。

十周では時間もかかり、後の行事に差し支えるはずだのに、この曹長はそのような気配りは無いようであった。生徒は、途中でだらけ始める、曹長から見えない庫の裏側で一周、二周サボるものも出てきたり、ずいぶん時間がかかった。

この曹長は空手をやったことがあるとかであったが、週番下士に上番したとき生徒の実習作業中、各内務班全員百二十名の整頓棚をご丁寧にもいちいち木銃でひっくり返し、夕刻、自習室に全員集合させた。

「貴様等たるんでいる！」と意味不明の説教の後、中隊全員百二十人を殴った。「向こうの隅から出てこい」、自分はその隅から二番目である。殴られたとき、拳骨の当たった個所が悪かったのか後頭部がグキッとずれたような気がして「アッ、反対側をもう一発殴ってくれんかな」とチラッと思ったが、勿論そのようなことは出来るはずもなく、パッと敬礼して自席に戻った。間もなく意識が朦朧となり、班長の下士官室で寝かされ、そのうち正気に戻ったことがあった。

暴力で人間の性格が変わるはずはない、と普通は考えるが、このような環境で三年間暮らすと確かに変わった。上級学校卒業のころは、誰も入校当初の「坊や顔」は消え去って、目つきも鋭くなり、言語・態度・動作もきびきび、一人前の軍人として部隊で年長の兵を扱わねばならぬ自信も出来て自分自身変わったな、と思うようになった。

少年飛行兵は、二十期生まであり実戦参加者は十六期生までであるが、後輩の彼らも大なり小なり私的制裁の被害に遭ったことであろう。

上級学校卒業、部隊配属で戦隊に配属になればすぐに作戦に従事することになるし、教育関係部隊に配属になれば日常飛行訓練に忙殺される。

十五歳で陸軍の学校に入校以来、軍隊という閉鎖された社会で成長してきているから、学んだことと言えば、軍事に関することばかりで、文学・芸術・哲学・宗教などとは全く無縁であった。

部隊でも私物の本を持つことは許可がいる。ラジオをきくことなど考えられないし、新聞でさえ読んだこともなかった。

したがって、人間としては融通の利かない朴念仁に育ったかもしれぬが、軍人としては、若年ながら優秀な軍人に仕立て上げられたのではなかろうか。

昭和十四年十月、東航校に入校した我々九期は、終戦時、二十一、二歳で軍曹であったが、同期中には、大活躍を遂げたものが何名もいる。

代表的な二名の勇士を簡単に紹介したい。

陸軍武功章に輝いた根岸延次

彼は、二式複戦を装備した夜間防空専任部隊の五十三戦隊所属であったがB－29六機撃墜、七機撃破の偉功を挙げ陸軍武功章に輝き、終戦の年の七月曹長に進級した。話を聞いてみるとB－29の機銃装備などもよく研究し敵のレーダー射撃などの回避の仕方や攻撃の方法など彼が自分で開発した戦術があったらしい。機首に装備された対戦車砲37ミリ「ホ－２０３」よりも、背中に取り付けた「ホ－５」上向35度の20ミリ砲2門を効果的に使ったという。敵が探照灯に目がくらんでいる好機をとらえて後上方より突っ込み、敵の腹の下四、五メートル、接触せんばかりの近距離に近づいて背中の「ホ－５」の引き金を引き、サーッと闇に回

避する。

武功章授与のとき、東部軍司令官田中静壱大将が、じきじき武功章を胸に付けてくれて「ご苦労であった。今後も命を大事にして決して死に急ぎしないように。一日でも長生きして首都防衛に活躍してほしい」と温顔に笑みをたたえて話しかけてくれたらしい。田中大将は、終戦後まもなく拳銃自決されるのだが、根岸は今でも尊敬の念を抱いている。

陸軍少尉に任官した古谷恒

所沢整備学校で九七重Ⅱ型を専攻して十四戦隊に配属となり、機上機関として南方で転戦、不時着して踝を骨折したり、ラバウルで地上整備中、グラマンの奇襲に遭って右半身に無数の破片創、右手切断に遭うところを上司の指示で助かったり、レイテ攻撃に単機出撃、帰途天候急変、飛行限度の八時間経過しても位置がつかめず、高空レバー操作や機体を傾け、各タンクを空にするなどの操作でガソリンを節約しながら飛び続け、九七重Ⅱ型の最大飛行時間八時間を超えて九時間十五分の滞空記録を樹立したことが名機付長として彼の評価を上層部に印象づけた。そのことによって偉業を達成することになる。

ウエワクに孤立させられた第十八軍に対し、真空管などの通信機部品、電池、医薬品の緊急輸送を南方総軍から依頼され、滞空記録樹立の古谷機付長の機が数回目の決行でついに成功し、三月十一日付で南方総軍の寺内大将より感状が授与され、即日、特進して陸軍少尉となった。乗っていった飛行機を焼却し、第十八軍司令部に勤務していたが、玉砕命令が出て、古谷少尉は小隊長として歩兵を指揮して数回、切り込みに出撃したりしているうちに終戦を迎えた。

整備学校時代、彼は隣の班であったが背は低い方で真面目な目立たない生徒であった。

特攻へ

戦争も追い詰められた昭和十九年十月から始まった絶対必死の特攻作戦では、急降下、超低空接敵などの限られた技術さえ叩き込めば良く、通常、六百時間以上の経験が必要とされた戦技教育も必要としなかったから、錬成教育を修了したばかり経験不足でも気力に満ちた少飛出身者はうってつけの存在であったことがうかがわれる。

昭和十九年十月から二十年三月ごろまでフィリピン方面で特攻作戦が行われていたころは十三期生までが出撃しているが、四月の沖縄特攻になると錬成教育終了直後の十四、十五期生が特攻訓練だけで出撃している。その総数二百九名であるが中に一名だけはマレーから出撃している。それは、私も所属していたことのあるマレー・タイピンの第三教育飛行隊から七期の山本玄治曹長とともにプーケット沖の英機動部隊を攻撃、大型艦二隻轟撃沈し感状を授与された大村伍長である。

訓練中の少飛出身隊員は、隊長に呼ばれて特攻隊員に選ばれたことを告げられると、内務班に飛んで帰って「俺は、特攻隊員に選ばれた！」と顔を真っ赤にして喜んで飛び跳ねていたとか、選に漏れると、隊長に「ぜひ自分を隊員にしてくれ」と嘆願に行き選ばれて出撃した話をいくつも聞いた。

栃木県出身者で生き残りの特攻隊員の座談会をやり、彼らが選ばれた時の心境を聞いたことがあったが、「俺たち新米操縦は、空中戦等でどうせ死ぬんだから、撃墜されて死ぬより特攻で死んだ方がいい」と思っていたとか、中には「死んだら少尉になれる。俺の村で将校になった人は居ない」などと云った者もいた。総じて、あまり死ぬことに拘泥してなかった。

命を惜しまない風潮を育てた時代背景

昭和という時代が始まった頃に生を受けた我らの成長期は、昭和三年張作霖爆殺、昭和六年満州事変勃発など十五年戦争の渦中であったから物心がついた幼児期から目に入るもの、教えられるものすべては、大御稜威（おおみいつ）の下、東亜の盟主として誇り高い日本人、日の丸の旗を先頭に押し進む勇ましい皇軍兵士であった。

幼児期

♪鉄砲かついだ兵隊さん　足並みそろえてあるいてる
トットコ、トットコ　あるいてる
兵隊さんはきれいだな
へいたいさんは大好きだ

♪僕は軍人大好きよ　今に大きくなったなら
勲章つけて　剣さげて　お馬にのって　ハイドウドウ

であり、小学校の国語や修身の教科書は軍国美談が多く掲載され、隊列を組んで行進の曲は「爆弾三勇士」（♪廟行鎮の敵の陣　われの友隊　すでに攻む）であったりして周囲の環境はすべて少年たちの軍国熱を煽るものであっ

た。

中学校や青年学校は服装からして軍人並みにゲートルを巻き、背嚢を背負って登下校し、教練という科目が存在して佐官クラスの配属将校が訓育に当たり軍隊予備校の感じであった。

したがって、幼いころから自分の命は、国家に、天皇陛下にささげるものだ、という観念が無意識のうちに醸成されていたような気がする。

敗戦後の大衆の意識が自由、自由となんでも自分勝手でよいとする風潮がしみ込んだように、戦争中の大衆の意識は、なんでもお国の為であったから、大東亜戦争も敗戦に至るまで大半の国民が戦争にすべてを捧げて協力し、家族の若い者が軍人になることは名誉なことであり、戦死することはお国に忠節を尽くし、最大の家門の誉であった。

敗戦のとき、大衆は茫然自失し、悔し涙にくれ、宮城前で土下座して天皇陛下に臣節を尽くすことが及ばなくて申し訳ございませんでした、と詫び、東久邇内閣が「一億総懺悔」と唱えても「それは、責任を大衆に転嫁するものだ」などとは考えず「なるほどそうか」と、すんなり受け入れたことが一時的にもあったことなども、戦中の大衆意識の表れであろう。（もっとも、それは敗戦直後のほんの一時期のことで、間もなく戦時下の抑圧された感情は一気に吹き飛んでなんでも自由の放埒な時期を迎えるのであるが）

そのような基盤で成長し、十五、六歳で軍隊の学校という外部と隔絶した組織で、さらに軍人精神を叩き込めば、お国の為に命など惜しくない。命を捧げるのは名誉なことなのだ、という意識の権化となったのも不思議ではないような気がする。

私が、熊本県菊池の第百三教飛聯に所属していたころ、十期操縦の鹿児島出身岩崎伍長が我々の第三中隊（直協）に配属されてきた。十八年十月フイリピンに移駐するとき、私は機付長として彼が操縦する機に同乗して編隊長機の三番機として飛んだ。長機の中隊長は、二人とも十九歳の少飛出身下士官を手元で監視のために三番機としたのであろう。

岩崎は、出発の時、「先輩、何か異常があったら低空反転やりますからね」と強い目つきで私に言った。低空反転すると絶対助からない。私は「おい、おい」と言っただけであったが彼は、死ぬことを何とも思っていないように見えた。

ルソン島ナガ郊外のジャングルを切り開いた急造飛行場で半年間の訓練を終了してから翌年四月、私らの第三直協中隊は、新設第三十教飛（襲撃機）編成要員として熊本に帰還したがその時岩崎も一緒に帰還した。

彼は、それから半年後、菊池郊外に墜落事故死した。墜落の状況の委細は分からなかったが、私は、彼は望んでいた通り低空反転をやってのけたのではないかと思っている。

少飛特攻隊員選抜

特攻作戦も初期の「フイリピン特攻」の隊員たちは、連日の死闘に未帰還者が続出する状況にあって、仇討とばかり我も我もと何のためらいもなく特攻を希望して出撃したのではないか、と思っていたら、必ずしもそうではなかったらしい。我々はまだまだ敵と戦える、「これっきりでおしまいの特攻」などで命を亡くすよりも、飽く迄敵と戦って死にたい、と考える隊員が多かったような記録がある。隊長から叱咤され、他の者に同調してやむなく手を挙げるなどのことがあったらしい。

沖縄特攻になると、飛行時間も短く戦闘経験など全くなくても特攻隊員になれる。名誉な死に場所が与えられるとして、ようやく基本教育を終えたばかりで軍人精神を叩き込まれている十四期、十五期の少年たちが我も我もと志願するようになった。

彼らは、特攻隊員として別扱いとなると、誇らしく思い、意気ますます上がり、特攻訓練にも身が入り、引き上げの高度も地上すれすれに突っ込んで引き上げてみたり、国内では、勝手に郷土訪問をしてみたり、中国では揚子江上の魚船を標的にして何回もダイブし支那人漁師の肝をひやりとさせたり、など意気軒昂であった。彼らの写真を見ると一様に何の未練もないあっけらかんとした笑顔で写っている。

出撃率低下の一例

沖縄特攻に戦局が移ってからはエンジン故障、天候不良の口実で引き返すものが増え、出撃率は低下していったという。

私が所属した第三十教飛は、熊本・菊池から昭和十九年十一月、朝鮮南端の泗川飛行場に移駐した。翌年二月初め、下士官以上本部前集合ということで本部のある丘の上に集まったが、いつまで待っても幹部は姿を見せず、多分特攻隊編成のことらしいぞ、とひそひそ囁かれていたが流れ解散となった。どうやら、特攻選抜者発表のことについて部隊幹部間で意思が統一されなかったらしい。

その数日後、特攻隊が編成された。話によると特攻隊の編成は志願ではなく指名であったようである。

隊長五十六期大櫃中尉、特操少尉二名、助教伍長二名、訓練中の少飛一五期七名の計一二名で、彼らは宿舎も別になり、午前中、特攻訓練に離陸して行き、玄界灘沿海で突撃の訓練をして昼ごろ戻ってくると午後は晋州の町にトラックで外出、この世の名残に命の充足を図ったようであった。

そのうちにまた特操一期吉羽少尉を隊長とする同じような構成の一隊が編成された。

出陣式は、二月十一日紀元節の日に飛行場で行われた。物凄く寒い日で、冷たい風が砂塵を巻き上げていた。演壇の前に二隊の隊員が横一列に並び、大櫃隊は普通の軍服姿であった。

その後方に、作業服姿の整備隊が並んだが、隊長の訓示は全然聞き取れず寒さに震えていた。部隊長佐藤少佐は、平常から風采も上がらず声も低く、てきぱきと軍人らしい行動のとれない人物の様であった。

大櫃隊は陸路岐阜に飛行機受領に出発、吉羽隊の機は離陸して行ったが、上空で編隊を組もうとしているうちに、一機が降りてくる、そのうちにまた一機、また一機と降りてきて結局全機戻ってきた。エンジン不調とのことであったが、特別の不具合は発見できず、翌日、やっと全機が出撃していった。天候も寒い陰気な日であったが気合の入った出撃風景ではなく、何となく陰気な重い感じの出陣風景であった。私は整備班の第二内務班長を務めていたが、その後、三月の末、福生整備学校に乙種学生として派遣になり三十教飛から離れたので、その後の経緯は不明であった。

戦後、昭和も五十年ころのことであったと思うが、高木俊朗著『知覧』を読んで驚いた。その本の始めの方にある「孤独の命」という章の話は、私が見送った第三十振武隊特攻隊員の生存者河崎伍長についてのことであった。

河崎伍長は知覧から出撃したが天候不良で引き返し、黄疸で発熱して翌日、出撃できず、寝ているときに空襲があって自分の機は破壊され、出撃が延びる。福岡に飛行機受領に行ったら知覧の自分の機の修理が出来たという連絡が入り、知覧に引き返すときに乗った飛行機の操縦者が、何と同じ三十振武隊の別の隊長吉羽少尉であった。

菊池に着陸して、隈府の町や熊本に出て旅館に泊まったりして勝手に日を過ごし、出撃を拒否し、逃亡する吉羽少尉に彼は同行していたが憲兵に逮捕され、参謀に殴り倒され、菊池から福岡に護送される。福岡で河崎伍長は「おかまいなし」となって知覧に帰り、そのうち終戦を迎えるという数奇な運命に翻弄され、結局生き残った。

特操出身吉羽少尉は軍法会議でどうなったかはわからない。

この隊は、岐阜で第三航空軍のプノンペンに行くように指示されたり、途中朝鮮大邱まで行ったとき、知覧に行けの指示が出たり、一名が墜落事故の破片で事故死したり、すんなりと事が運ばず、隊長以下、意気が上がらなかったようであるが、戦後調べてみると、命令で特攻隊員となった第三十振武隊員二十四名中、実際に出撃したのは僅か三名の最下級の兵長である少飛出身者だけで後は生き残っていた。

私は、これを読んで感じたことは、陸士出身大櫃中尉にしても特操出身の他の将校にしても、どのような理由で生き残ったかは、記録されてないからわからないが、結局、あの、朝鮮泗川飛行場での意気振わない陰気な出陣式を思い起こし、そのような隊員の中で如何に少飛出身者が潔く出撃できたか、ということであった。

沖縄特攻では、出撃しても、天候不良で、或いはエンジン故障で引き返したり、途中の島に不時着したりが増えている。旧式機をかき集めたり、練習機であったりで故障が増えるのは当然であったろうが、故障を装う方法に次のような手段もある。

飛行機のエンジンの電気系統は、どのエンジンでも同じだが、各気筒の点火栓は前方後方の二系統の電気点火式になっていて、操縦席のスイッチで切り替えられる。一系統のスイッチを切ってしばらく飛べば間もなくエンジン不調となって飛行不能となる。

実際の故障や天候不良で途中の島に不時着して、苦心の末、数日或いは一か月以上も経過して帰還すると、参謀から罵声を浴び、殴り倒されるようなこともあったらしい。すでに彼らは特攻戦死の手続き済みで、生存していては何かと不具合で死んでもらわねばならず、すぐに出撃を強制されることもあったような記録がある。

また、出撃拒否で参謀から気合をかけられた後、そのような者ばかりを収容する施設があって、そこで、軍人勅諭の筆写や、修養の生活を送らされたとのことであるが、そこに収容された少飛出身下士官が居たという記録を目にすることは無い。

少飛出身特攻隊員

少飛出身特攻隊員たちは、出撃前、歌ばかり歌っていてじっくり考えているようなものは少なかった、とか遺書

なども紋切型の者が多いし、代筆の者もある、というような記事をちらっと目にしたこともあったが、女性関係で悩むようなものもなく、純一無雑、教えられたとおり何のためらいもなく潔く出撃していった。

二百五十キロ爆弾を抱いて離陸することさえ初めてであったろうし、敵機にまみえることも初めての経験で、その際、反撃も叶わず、軽快な回避動作さえできずに、グラマンの銃弾を浴び、撃墜されるとき、また、うまくグラマンの目を逃れて敵艦めがけて急降下するとき、猛烈な対空砲火が集中してくる中を目をカッと開いて機首が上がるのを必死で押さえながら突っ込む、何もかも初めての経験、その壮絶な戦闘の中で彼らは、どのような感情を胸に抱いたであろうか、即死すれば何も考える暇も無かったであろうが、いくらかでも意識があれば、特攻とはこのように凄まじいことであったのか、「畜生！残念！悔しい！」、そして教えられた「天皇陛下万歳」であったろうか、「おかーさん」ではなかったろうか。純真な少年たちの心情をおもんばかるとき、毎度胸が痛む。

栃木県出身少年飛行兵について

栃木県の少年飛行兵出身者は、一期生から二十期生まで約四百名であるが、実戦に参加した十五期生までの合計二百四十三名中、戦死者は七十二名、その中の特攻出撃者は五名である。

いずれも、今で言えば漸く「成人式」を迎えたか、迎える前の年頃の若者が爆弾を抱いた戦闘機を操縦して出撃、散華した。

特攻出撃者は勿論全員遺書をしたためている。検閲があるので紋切り型のものが多いが、この中の二人、塩原出身星忠治と黒磯出身渡辺綱三が長文の遺書を残した。

知覧の基地には、知覧高女の女生徒たちが隊員の洗濯や雑用などの奉仕に来ていたので、彼女たちにこっそり郵便物の投函を託したり、見送りの者に依頼したりして検閲を逃れたようである。

いずれも、十九歳とは思えぬように達筆で、家族を思いやる気持ちが溢れており優秀な人材であったことが伺われる。

長文のため省略した部分もあるが以下にお二人の遺書を紹介する。

遺　書

星　忠治（塩原出身、第五十三振武隊員、十四期生、十九歳）

特攻出陣に際して

ご両親様には二十年間色々と可愛がってくだされ、忠治としては何等なすことなく死す。実に残念に思いますが、名誉ある特別攻撃隊に参加出きる事は男児として本懐之に過ぎるものはありません。

一たび、飛び立てば敵艦隊に突進、一機よく敵艦に命中、必ずこれを轟沈致す覚悟です。

少年飛行兵を志願した時より、もう覚悟は定まって居りました。

当隊にて特攻の編成をする時は、隊長にお願いしましたが駄目で、再びお願いしてやっと参加を命ぜられました。その時の嬉しさは何にたとう事があるでしょう。日本男児でなくて何で出来ましょう。

私の死を聞き、かりそめにも女々しく泣かれては困ります。名誉な事ではないでしょうか。悠久の大義に生きるのです。死ぬと思ったら大間違いです。

今更遺書ということもありませんが、静子だけは一人前の常識ある純真な、時局に副うような女にして下さい。幼少のときより私になつき自分も可愛かったです。どうか立派な女性にして下さい。それだけは、真にお願いいたします。

叱っても何とか立派な者にして下さい。病気には絶対にさせぬようくれぐれもお願いいたします。

庄平は中島飛行機におることでしょう。小さいときはよく叱ったものですが、あれは可愛かったです。可愛かったがゆえに叱りもして立派なものにしようと思ったのです。庄平君ゆるしてくれ。

武二兄さんには、小さいときよりいろいろおせわになりました。日光精銅所に居るときは、わざわざ来て頂き実に有り難く思っております。もしも、空母を撃沈したら靖國神社に来てください。文句ばかり言ってまことに申し訳なく思います。

戦艦に命中したら線香を上げて下さい。悪いことですが、タバコが非常に好きになってしまいましたので、タバコもお願いします。

（中略）

母上様、二十年間、実に良い母でした。この忠治の立派に死ぬのも、否、悠久の大義に生きるのも母の力です。不自由な夫を助け、女手一つで六人の子を訓育されたのは、日本の母でなくて何でしょう。命中一秒前までも決して忠治は日本の強い母を忘れません。

決して功を誇らず、真の日本の母として庄平を立派に育て、私に続く様やってください。もしも、兄弟五人が飛行兵なら空母五艦をやることが出来ます。

遺骨は帰らぬと思いますが、ご両親様始め兄弟皆さんも皇土をしっかり守って下さい。思い残すことはありません。

（それからお世話になった隊長や知人九人の名を挙げて、その方たちによろしくと書き）

静子よ、立派な女性になれ、さようなら

庄平君頑張れ、忠治も散る、山桜のごとく。

戦友三羽烏の遺族の方を慰めてやってください。

（として、戦友遺族の住所が記載されてある）

以上

遺　書

渡辺綱三（黒磯出身、第四百三十一振武隊、十四期生、十九歳）

ご両親様、その後如何致して居られますや。

綱三も此の世に生を受け何の心配苦労も無く暖かき父母の手に育てられ、ここに二十年の年月が過ぎ去りました。

この間、兄弟中で一番弱き身としてご両親様には一方ならぬご心配をかけました。ある時は死を目前に寄せ、長く病床に伏し、又たびたび床につきし時も不眠の看護により今日あるを得ました。にもかかわらず何一つ孝行とて無く過ぎましたこと残念に思っております。

このたび特攻隊員に選ばれました。男子の本懐之を他にして何がありましょうか。また、之が父母に対してせめてもの孝行と思い、ご両親の写真を胸に一日も早く来る日を夢見つつ猛訓練を続けてまいりました。

空飛ぶ身なれば、敵艦上に散れ、敵機上に散れ、何れにせよ五体の還らぬは火を見るより明らかなれば、せめてこれをもって綱三と思いくだされ度く若干の毛を同封致しました。

綱三こと、ご両親より先に逝きますことお許し下さい。門出以来、ご両親様には今日あることを覚悟せられていた事と思いますが、絶対に力を落とす事なく長生きされることをお祈り致します。

清兄さん、元正兄さん、
ふじ子姉さん、はない姉さん、
きみえ、きのい、愛妹の皆様のご無事をお祈りいたします。

ただ一つこの綱三に代わりご両親様の御孝養をお願いいたします。

一、金銭貸借無し

一、婦人関係無し

御両親様　　綱三儀

そして、出撃前の最後の手紙

この便りの届く頃は早や永遠の眠りについております。しかし父上決して淋しく思わんで下さい。

綱三は、ご両親様より先に逝きますが、大和男児としての本懐、大義の下、喜んで体当たりを致します。必ず轟沈の報をお知らせ致します。

では、もう何も思い残すことはありません。只今までの不孝くれぐれもお許しの程を。

「大命のまにまに逝かむ今日の日を吾が父母や何とたたえん」

お父さん、お母さん、さようなら

五月二十日　　綱三拝

渡辺綱三がわざわざ末尾に書いた「金銭貸借無し、婦人関係無し」については、色々なことが推量される。

借金をしたまま死ねば親に迷惑がかかる。そんなことはありませんでした、の気持ちはわかるが、当時、町に飲み屋や、菓子屋などはもう無かったし、戦友同士の金銭貸借などは普通無かった。仮にあったとしても微々たる額で後に迷惑を及ぼすような大きな借金をするはずは無かったから、この条項は、次の女性関係無し、を書きたかったのではないか。

あのころは、異性への憧れみたいなものは、誰でも胸に抱いていたが表向きは殊更に無関心を装って居た。俺は陸軍生徒だ、という誇りもあって町で女学生たちに会えばわざと知らぬ顔をしてすれ違ったものであった。心の奥底には、憧れを抱いていたのに女性の何たるかも知らずに俺は死ぬ。ちょっぴりうがった推量をすれば、胸底にある残念な気持ちを逆の表現として書き残したかったのではなかろうか。少飛出身特攻隊員たちは童貞のまま散っていった。

あとがき

戦後、特攻に関する記録は多く出版されている。それらの記録に目を通してみると、陸、海共に多くは学業半ばに軍隊に入った学徒出陣の方々のものが多い。奥さんも、子供さんもいたり、新婚早々或いは、恋愛中といった方々のものもある。

学業途上から応召して速成将校となった若者であるから、人生とは、の疑問や個人と国家のかかわりなどの問題を追及して悩みながら、しかし、そ

れなりに、ともかく何とか一応の心境に到達して出撃した様子が伺える。

陸軍特攻の基盤を形成したのは、彼らと少年飛行兵出身者たちであった。

学徒出陣特攻隊員に比べ、草莽の一兵士として、何ら疑念を抱くことも無く従容として、ひたすら国の将来を思い、家族の安泰の為にと一身をなげうった多くの少年飛行兵出身特攻隊員たちのことについては戦後、記録されたものは少なくあまり知られていない。

散るを惜しまず、南の空に「雲染むかばね」と消え去った彼らは今、あの世で何を思っているであろうか。「俺らは、大義に殉じた。短い人生であったが満足だ」と思っているか、それとも「俺らは軍国主義の犠牲となった。俺も生き残って貴様らのように戦後の人生を生きてみたかった」というであろうか、おりふし、考える。

優れた彼らがもし生き残っていたとしたら、日本の再建はもっともっと素晴らしいものになっていたであろうし、優れた多くの子孫を育んだことであろう。

歴史が大きく変革をするときには多くの優れた若者の命が失われる。変革のための生け贄を神が必要としているのかもしれない。

生き残った者は忸怩の思いはあるが、彼らの霊を慰めると共に彼らの祖国愛、家族愛を現代の若者に伝えるのが務めではなかろうかとの結論に達する。

戦争で生き残った者も、どんどん世を去ってゆく。純真無垢のまま命を散らした彼ら少年特攻兵士のことを生ある限り語り継ぎたい。

著者近影

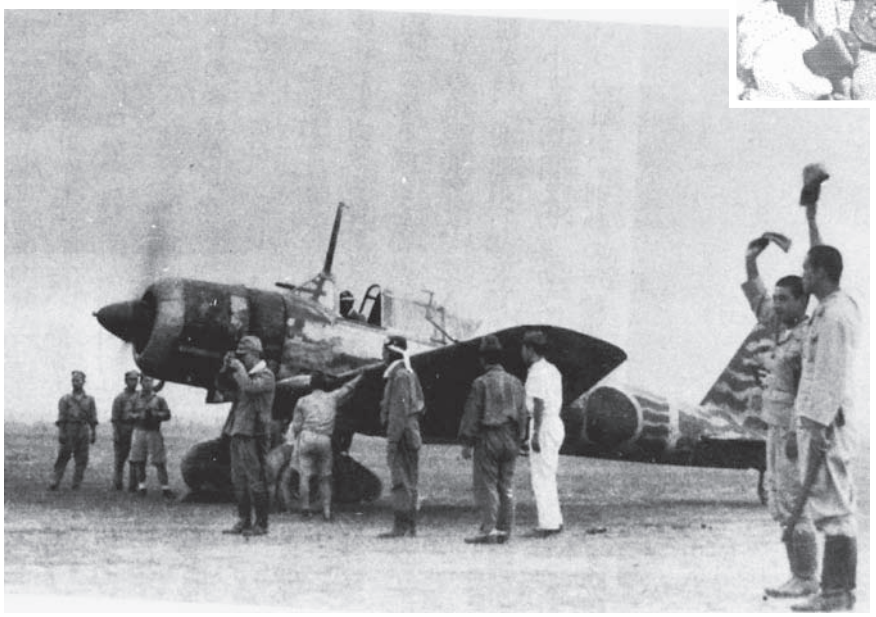
熊本・菊池、第百三教飛聯、伍長の頃

東京陸軍航空学校のころ

九八式直協偵察機

第五十三振武隊員
左から四人目、星忠治

第四百三十一振武隊員
渡辺綱三



マレー・タイピンより出撃する七生昭道特攻隊
（七期山本曹長・十四期大村伍長等）九九式襲撃機

「大刀洗平和記念館」を訪ねて

理事　廣嶋　文武

平成23年9月17日、旧陸軍大刀洗飛行学校跡地に建てられた「大刀洗平和記念館」を訪れる機会に恵まれた。

姪の案内で、福岡空港から車で筑前町へ向かった。筑後平野を走ることおよそ1時間半、一般道の車窓からは、秋の収穫も間近な田圃が広がり、稔るほど頭を下げる稲穂の波が揺らいでいた。畦道には真紅の曼珠沙華が鮮やかに咲き競っていた。

そのような田園風景の中に筑前町立「大刀洗平和記念館」はあった。既に観光バスが2台到着しており、大勢の参観者で賑わっていた。

館内に入ると、床面に、かつての陸軍大刀洗飛行学校とその飛行場周辺が図示されており、案内人（実は館長さん）の説明で、戦時中の様子が良く分かった。

すぐにベルが鳴って「語りの部屋」の案内があったので、その部屋に入ると、シアター映像で「大刀洗１９４５・３・27」の上映と3名のボランティアによる詩の朗読があった。

昭和20年3月27日、B29の爆撃で、多くの児童達が犠牲になったことなどを祖母が孫に語り伝える映像と、詩の朗読が静寂な館内で続けられた。ここ大刀洗飛行学校の分教場があった知覧特攻基地、その分教場を巣立って特攻隊員となった少年飛行兵等とその母と慕われた鳥濱トメさんとの交流、中でも「帰って来た蛍」などの物語は、詩情に溢れ、何度聞いても感涙に咽ぶ。

館内には、陸軍の九七式戦闘機と海軍の零式戦闘機が展示されていた。九七式戦闘機は、国内現存の貴重な一機で、博多湾から引き揚げられたものとのことである。山本卓眞名誉会長も、かつて操縦をされたことがあり、性能の優秀な飛行機であったと仰っておられた。

また、大刀洗飛行学校で教育、訓練を受けた多くの勇士達の、愛する家族、父母・兄弟達への最後の便りなど多くの遺書、遺品などが展示されていて、参観者は一字一句、食い入るように見詰めていた。当日の参観者の大半は戦争を知らない人達と見受けられたが、特攻攻撃に使われた「さくら弾機」など、壮絶悲惨な戦争の実相を知り、生命の尊さを知っていただいたものと思う。

この展示品等によって靖國神社の遊就館や知覧特攻記念館などと同様、ひたすら国を思い、家族の幸せを願って一身を捧げた若者達の心情を理解してくれたものと思う。

この記念館は、3年前に公開され、既に35万人余の参観者を迎え、リーフレットによれば、「平和の大切さを語り継ぐ情報発信基地」として末永く存続されることを願っている。

中原敏隆館長さんは後日、「本館の内容の一層の充実を図るとともに、恒久平和を永く発信し続けることが、英霊への追悼であり、そのことを念頭に本館を運営して行きます」とのお便りを寄越されました。

平成23年度第３回定時理事会・臨時評議員会等報告

事務局長　羽渕　徹也

一　理事会、評議員会の開催

昨平成23年12月6日（火）（公財）水交会・会議室において、平成23年度の第3回定時理事会及び臨時評議員会が開催され、別掲の平成24年度事業計画及び同収支予算計画が審議され、案のとおり、いずれも全員一致で承認されました。また、志賀昭夫監事の辞任に伴う役員の交代等に関する事案について審議の結果、次のような新たな役員等の方々が選任されました。

理　事　辞任　栗原　宏
　　新任　衣笠　陽雄
監　事　辞任　志賀　昭夫
　　新任　栗原　宏
評議員　辞任　衣笠　陽雄
　　新任　太田　兼照
（世田谷山観音寺執事長）
　　新任　高嶋　博視
（前海自横須賀地方総監）

更に、その他の事項として、

①4月上旬、当顕彰会事務所を靖國神社・遊就館地階に移転する予定であること（電話番号等詳細は、後日決定次第お知らせします）。

②当顕彰会の細部業務実施のため、平成23年当初より設置された、企画委員会、広報委員会、募集委員会における検討状況、業務実施状況等に関すること。

③「特攻勇士之像」の全国護国神社への奉納事業の現況に関すること。

等につき、藤田専務理事から説明があり、各委員会委員との活発な意見交換が行われました。

二　第33回陸海軍特攻隊合同慰霊祭の開催について

本会報第90号に慰霊祭御案内を同封してありますが、会員の皆様方のみならず、御家族、ご友人の方などお誘い合わせの上、多数御出席くださるようお願い申し上げます。出席される方は、同封の払込み用紙に御記入の上、お申し込みください。

①　慰霊祭、懇親会の日時
平成24年3月24日（土）
11時～14時30分

②　慰霊祭
靖國神社拝殿・本殿
10時30分参集殿集合完了

③　懇親会
私学会館・アルカディア市ヶ谷
12時30分開始予定

④　会　費
慰霊祭及び懇親会出席者
一般会員　八〇〇〇円
遺族会員　七〇〇〇円
慰霊祭のみの出席者　二〇〇〇円

三　事務局員の退職

長年当顕彰会に勤務しておりました大澤　清事務局員は、昨年10月末日をもって退職し、退会しましたので、新たに、本年4月当初に、金子敬志（海上自衛隊出身）を事務局員に採用の予定です。

以　上

○　平成24年度事業計画

一　方　針

当顕彰会は、特攻隊戦没者の慰霊顕彰を主たる事業として各種公益目的事業を推進する。また、会員の高齢化に伴って会員数の減少を防止することが困難な状況にあって、慰霊活動等の事業を継続するため、会員による広報及び募集活動を通じて会勢拡充を図る。

二　各種実施事業

1　慰霊事業

ア　春の靖國神社における陸海軍特攻隊合同慰霊祭及び9月23日の世田谷山観音寺における特攻平和観音年次法要を実施する。

イ　国内外の他慰霊団体が実施する特攻隊戦没者に関連する慰霊祭等には、陸海軍のバランス及び特攻作戦の種別等を考慮し、参加又は協力を行う。

2　広報事業

ア　貴重な歴史的資料として位置付けられる広報誌・会報『特攻』を発行する。これには、特攻隊戦没者等の関連記事及び特攻関係生存者の伝承記事等を掲載し、会員に配布するとともに会員以外の希望者に頒布する。

イ　ホームページ上に、会報『特攻』の内容を公開するとともに、可能な範囲で特攻隊戦没者等に関わる慰霊祭情報などを掲載する。また、法令に定められた当顕彰会の運営状況等の情報を公開する。

ウ　若者が興味を抱くようなホームページへの更新、各地の慰霊祭会場等における種々の広報・募集活動を行い、当顕彰会の会勢拡充を効率的に実施する。

3　出版事業

ア　特攻隊戦没者等に関する史実の調査及び研究資料等の収集を行う。また、可能な限り特攻隊関係者から体験談等を直接聴取し、記録として残す。

イ　従前に刊行・作成した特攻隊戦没者等に関する図書、資料等を会員及び会員以外の希望者に頒布又は紹介する。

4　特攻勇士の像建立事業

各地の護国神社等へ「特攻勇士之像」を奉納する事業を継続する。

三　各委員会業務

1　企画委員会

ア　当顕彰会が実施する慰霊祭に関し、可能な支援を行うとともに、特攻勇士の像建立事業に関する資料を作成・配布する。

イ　当顕彰会主催による、特攻に関わる講習会及び懇談会の開催について検討する。

2　募集委員会

募集活動に必要な当顕彰会としてのパンフレット及び掲示幕などを作成する。

また、効率的な会員の募集活動実施のため、公的機関との連携及び全国的規模での募集要領などを定め、計画的に実行する。

3　広報委員会

会報『特攻』を継続発行するとともに、現在のホームページを、会員募集に効果的なコンテンツ等を整備し、若者を含め多数の者が関心を持つような内容に更新する。

四　その他の事項

新公益財団法人への移行認定を受けて1年を経過し、新たに公益法人の事業推進に伴う必要な執行態勢等を整備する。

(公財) 特攻隊戦没者慰霊顕彰会
平成２４年度正味財産増減収支予算計画書

平成２４年１月１日から平成２４年１２月３１日まで　　(単位：円)

科　　目	予算額	前年度予算額	増　減	備　　考
Ⅰ　経常増減の部				
1　経常収益				
①　基本財産運用収入	6,100,000	6,180,000	△ 80,000	為替変動による
②　特定資産運用収入	95,000	70,000	25,000	
③　会費収入				
年会費	5,750,000	6,200,000	△ 450,000	会費減少
④　事業収入				
慰霊事業収入	3,650,000	3,800,000	△ 150,000	参列者減
出版事業収入	300,000	300,000	0	
⑤　寄付金	2,000,000	1,200,000	800,000	実績見込み
⑥　雑収入	50,000	50,000	0	
経常収益計	17,945,000	17,800,000	145,000	
2　経常費用				
①　事業費				
慰霊祭懇親会費	1,430,000	1,000,000	430,000	単価増
像制作委託費	1,200,000	600,000	600,000	像建立経費
発送等委託費	1,630,000	1,630,000	0	
他団体寄付金	2,740,000	2,850,000	△ 110,000	
役員報酬	280,000	280,000	0	
給料手当	3,980,000	4,100,000	△ 120,000	
福利厚生費	540,000	520,000	20,000	
旅費交通費	2,690,000	1,880,000	810,000	委員会経費
通信運搬費	520,000	520,000	0	
減価償却費	165,610	129,800	35,810	
消耗品費	340,000	340,000	0	
印刷製本費	2,520,000	2,670,000	△ 150,000	
会議費	300,000	300,000	0	
光熱水料費	100,000	100,000	0	
賃借料	1,540,000	1,440,000	100,000	
諸謝金	130,000	180,000	△ 50,000	
租税公課	0	70,000	△ 70,000	
雑支出	100,000	200,000	△ 100,000	
経常費用計	20,205,610	18,809,800	1,395,810	
評価損益等調整前経常増減	△ 2,260,610	△ 1,009,800	△ 1,250,810	
基本財産評価損益等	107,384	144,056	△ 36,672	
特定資産評価損益等	0	0	0	
当期経常増減額	△ 2,153,226	△ 865,744	△ 1,287,482	
Ⅱ　経常外増減の部	0	0	0	
1　経常外収益	0	0	0	
特攻像建立基金取崩	1,200,000	0	1,200,000	収入額減少のため
投資活動収益計	1,200,000	0	1,200,000	
2　経常外費用	0	0	0	
退職引当資産取得支出	214,000	164,000	50,000	
経常外費用計	214,000	164,000	50,000	
当期経常外増減額	986,000	△ 164,000	1,150,000	
当期一般正味財産増減額	△ 1,167,226	△ 1,029,744	△ 137,482	
一般正味財産期首残高	7,444,789	8,474,533	△ 1,029,744	
一般正味財産期末残高	6,277,563	7,444,789	△ 1,167,226	
Ⅲ　指定正味財産増減の部	0	0	0	
一般正味財産への振替	1,200,000	0	1,200,000	
当期指定正味財産増減額	0	0	0	
指定正味財産期首残高	274,400,000	274,400,000	0	
指定正味財産期末残高	273,200,000	274,400,000	△ 1,200,000	
Ⅳ　正味財産期末残高	279,477,563	281,844,789	△ 2,367,226	

事務局からの報告等

寄附者御芳名（敬称略）

（平成23年10月1日～12月31日）

（単位千円）

一三　杉山　蕃　七　渡部　利久
七　篠崎　善治　七　田村　智亮
七　谷口　正範　五　阿部　敏行
四　大平　司　三　中本　昭二
三　按田　卓郎　二　川田　信雄

御芳志誠に有り難うございました。

◇　◇　◇

新入会員名簿（敬称略）

（平成23年10月1日～12月31日）

北海道　茂木　尚
栃木県　水谷　郷
埼玉県　髙嶋　博視
千葉県　堤　裕　出村　政成
東京都　安藤　愿英　恩田　住子
齊藤　誠　竹田　恒泰
宗像　正吉　岡田　真治
小林　正雄　谷口　正範
舟橋　初花　山崎　利子
森山　法人
神奈川県　早川　文象　田村　智亮
伊藤　浩一
新潟県　石塚　健
長野県　酒井　志郎
岐阜県　亀山　裕弘
京都府　久野　潤
大阪府　林　佐吉　香坂佳奈子
奈良県　前芝　辰二
広島県　寺崎　慶子
宮崎県　木嶋　康治

◆　◆　◆

会員訃報（敬称略）

謹んで哀悼の意を捧げます。

北海道　西岡　正
宮城県　渡部　市郎（23・11・10）
福島県　門馬　秀行（22・8・3）
茨城県　飯塚　網紀（22・3）
千葉県　植野　珪（23・5・18）
東京都　宇佐美利夫（23・10・15）
早川　一喜（23・11・10）
門馬　将義
高橋　威彦（23・9）
岡本　隆久（23・10・10）
青木　誠
神奈川県　勝又　一郎
真柳　敬（23・10・27）
江口周三郎
森内　乾（23・10・20）
本田　八郎
白木　萬輔（22・4）
筒井　澄（23・11・10）
小寺　直之
小篤　信勝（23・5・19）

会員ご入会のご案内

当顕彰会は、先の大戦において、祖国の安泰を願い、家族や大切な人たちを案じつつ、自らの命を犠牲にして、それらを護ろうとした若い特攻隊員たちの御霊をお祀りして慰霊し、感謝することを目的とする団体であります。

私たちは、彼らからその精神を学び、現在の日本の現況や自分たちの生き方を考え、より良い社会の実現に寄与したいと活動を続けております。ご賛同の方のご入会をお願い申し上げます。

○当顕彰会の沿革

平成5年11月財団法人認可

初代会長　竹田　恒徳　元宮様

二代会長　瀬島　龍三　氏

三代会長　山本　卓眞　氏

現理事長　杉山　蕃　氏

○当顕彰会の主な事業

・特攻隊戦没者の慰霊顕彰

・講演会等の開催

・機関誌等の発刊その他

○年会費

・一般会員　3000円

・学生会員　1000円

〒105－0014　東京都港区芝2－5－19　TAビル4階

公益財団法人特攻隊戦没者慰霊顕彰会事務局

電　話03－5730－1016

FAX03－5730－1017

ご投稿についてのお願い

ご投稿に際しましては、次の点にご留意くださるようお願いいたします。

1　原稿は、手書き、ワープロ・パソコン作成のいずれでも結構ですが、なるべく縦書き、1段17字詰めでお願いします。

2　記事の取捨選択、紙面の都合等による一部割愛、修文等については、当協会事務局にお任せ願います。

3　慰霊祭、行事等の写真がありましたら、なるべく添付してください。

4　原稿、写真等は、原則としてお返しいたしませんが、必要の場合は、その旨お書き添えください。

5　会報・機関誌、投稿記事等の送付先は、左記の当顕彰会事務局宛としてください。

記

〒105－0014　東京都港区芝2－5－19　TAビル4階

（公財）特攻隊戦没者慰霊顕彰会事務局

電　話03－5730－1016

FAX03－5730－1017